太棹

第百號記念特輯

加藤虎之助 しげを画

第百號

東京 太棹社 發行

胃腸に ミラカチ

東京市日本橋區通二ノ五
新潮製藥株式會社
電話日本橋三八一二番
振替東京ト〇一〇八番

空氣がよくて
閑靜なアパアト
（省線蒲田驛下車松芳雜貨店より左へ入る）
蒲田區御園町二ノ一四
シルヴアハウス
電話蒲田三六二一番

風流・金ぷら・茶漬
【美地句】
大日屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

祝百號

廣瀨いろは	岡崎圓六	吉川浪補	山田呂聲	和田春和
阿部一	北島北斗	中澤巴	安藤どくろ	吉田登盛

（順イロハ）

祝百號

小川都山	小川都波	國友東光	安藤都昇	保々長平
栗原千鶴	緒方千晴	福田柳蝶	神馬里芳	岡本柳光

（イ　ロ　ハ　順）

祝百號

本木大熊	鈴木和樂	青山和狂	小林和舟	林和勢
飛石かなめ	黑川叶	高橋可遊	西田可松	大用大嘉津

（イ　ロ　ハ　順）

祝百號

田口辰壽	市會議員 山口玉造	疋田大龍	井上巽	小林太二八
根本團壽	野田高尾	坂倉素遊	井上素鳳	浮谷祖樂

（イ　ロ　ハ　順）

祝百號

柴野筑波	川口子太郎	小埜長とろ	宮本武藏	矢富靱
渡會うつぼ	乃村乃菊	山中花仙	青木大和	山下彌生

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

國井丸都	瀧脇まつば	平井昌子	松林福笑	長谷川文久
野田文玉	水戸部壽	河野國聲	原田越巴	富田紅陽

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

湯淺光玉	安藤光樂	寶藏寺天昇	岡田蝶花形	大築葵
及川旭	淺原朝正	柳有明	齋藤山生	平井榮

（イ　ロ　ハ　順）

祝百號

寺岡三幸	波多野三樂	井坂榮	細川清	野崎龜鶴
金田金鳳	久保田喜鶴	和田金扇	星野桔梗	錦錦松

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

坂本甲（きのえ）	淺田奇聲	藤本喜鳳	歸山歸世花	岩木義雀
川奈部銀司	吉良蟻若	保坂有曲	高瀨操	吉田美地句

（順　ハ　ロ　イ）

祝　百　號

城戸美登里	中山美浪	吉田三芳	横井三由	森三好
野口みなと	高橋宮古	鈴木松寶	玉井松樂	三口松藤

（イ　ロ　ハ　順）

祝百號

佐藤枝蝶	平井周樂	菊池秋月	濱口秋華	田口司重
田中司若	落合淑人	平井壽樂	上田上誠	高品一重

（イ　ロ　ハ　順）

祝百號

武笠宏亮	桑原美峰	松岡茂里雄	近江清華	白井清華
湯原清司	塚口清雀	齋藤正鳳	沼井盛鶴	的野關路

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

大垣城畔 吉岡十八公	名古屋 加藤兜	名古屋 社本兼太郎	徳島 齋藤鳴門	大阪 八木快蝶
樺太 宮下杉鳳	甲府 秋山ゆたか	神戸 岡田源	静岡 加藤壽松	長野 小林瓢

（順　ハ　ロ　イ）

祝　百　號

東京人形淨瑠璃藝術復興會

南北座

東京市目黑區中目黑
四丁目一四七五番地
電話大崎三八二九番

新義座

關東事務所　東京市芝區新橋二ノ八　志保屋　電話銀座二〇八番
中央事務所　大垣市城畔　吉岡樓　電話一〇八・一七九番
關西事務所　大坂市北區曾根崎新地三ノ一五　千代本　電話北一三五八番

東京女優歌舞伎劇
みぶり劇家元

竹澤龍造

自宅　熱海市旭川町新鈴よし
電話三四三〇番

竹澤龜次郎
座員弟子一同

本部　淺草區馬道町三ノ十五
支部　函館市相生町十八
支部　旭川市三條通九一
支部　京城府永樂町七八

前付一四

祝百號

竹本織太夫
豐竹呂太夫
竹本錣太夫
豐竹古靱太夫
竹本津太夫

野澤吉左
鶴澤寛治郎
鶴澤清六
豐澤廣助
鶴澤道八
鶴澤綱造

桐竹紋十郎
桐竹門三造
吉田榮

竹本土佐太夫
梅本香伯
米谷米翁

竹本陸路太夫
竹本隅榮太夫
竹本越名太夫
竹本叶美太夫

野澤勝平
野澤勝芳
鶴澤綱延
鶴澤德若

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

竹本稻太夫
豐竹巖太夫
豐澤猿之助
豐澤猿平
豐澤猿藏
豐澤猿三郎
鶴澤燕三
豐澤兵吉
竹本殿母太夫
豐竹巴太夫
豐澤良造
豐澤和孝
鶴澤勝助

鶴澤寛三郎
鶴澤亀造
竹本米太夫
豐澤芳太郎
豐澤團市
豐澤團吉
豐澤團八
豐竹杣太夫
豐澤宗之助
豐澤綱之助
豐澤鶴助
竹本浪花太夫
鶴澤仲三郎

祝百號

竹本卯太夫
野澤粂造
竹本彌國太夫
豐竹益太夫
豐澤松造
豐澤松四郎
鶴澤紘平
竹本近衛太夫
豐竹駒登太夫
野澤語左衛門
鶴澤好造
竹本朝見太夫
竹本東太夫

竹本さくら太夫
竹本里太夫
鶴澤蟻鳳
野澤吉作
鶴澤蟻三郎
豐竹湊太夫
竹本都太夫
野澤道之助
鶴澤司好
豐澤新次郎
鶴澤辰六
鶴澤紋左衛門
豐澤仙十郎

祝百號

豐竹猿司玉
豐澤猿幸
豐澤猿巴津昇
竹本播志保
竹豐竹巴雪
竹澤龍造
竹豐和歌吉
竹本佳照
竹本伊達子
竹澤本素昇
鶴澤鶴玉
竹本小津賀

京城
宇都宮
京都
大連

竹本駒若
竹本越道
竹本越秀
竹本綾三福
竹本素女
竹澤清一
鶴澤仙玉
豐澤
竹本東玉
竹本都雀
豐竹團司
竹本旭勝

（以上本誌創刊號より太夫、三味線諸氏の愛讀者又は多少とも御愛讀を賜りし各師の御芳名を掲載）

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

いろは會
猿滿會
巴津天會
巴雪會
芳聲會
豊仙會
東都五十義會
東都素義名流會
巴會
中老會
淨曲研究會
女天會

若手會
和孝會
兜兜會
兜會花組
かたばみ會
團の字會
大東京嬉會
素曲の會
素玄聯合淨曲研究會
津賀會
鶴玉會
無名會

（順　ハ　ロ　イ）

祝百號

彌生會
彌玉會
○○會
松葉會
ましら會
京濱素義聯盟會
五聲會
語樂會
湖月會
香伯會
互調會
駒登會

帝都素義聯合會
朝見會
綾秀會
三猿會
三福會
三華會
九皐會
義松會
銀座義榮會
都太夫會
綠會
道之助會

祝百號

出世會
松和會
司好會
清樂會
聲友會

大阪　大日本淨瑠璃會
京城　滿鮮素義聯盟會
德島　阿波素義聯合會
秋田　秋田素義研究會
京都　京都素義因會
横濱　金港花くらべ會
大連　旭勝會
大垣　麋勝會
名古屋　住繁會

（東京）

豐澤會
女子淨瑠璃研究會
女義東會
佳照會
勝女會
紅綠會
淺草音女會
義太夫研聲會
素女會

（順ハロイ）

祝百號

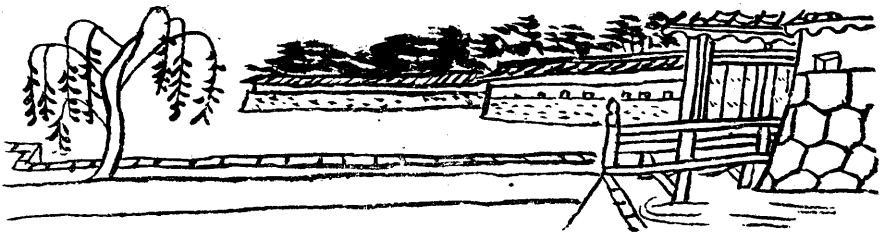
古川緑波	片岡仁左衛門	大谷友右衛門	片岡我當
市川左團次	栗島狹衣 同 すみ子	中村吉右衛門	尾上菊五郎

（イロハ順）

太　　棹

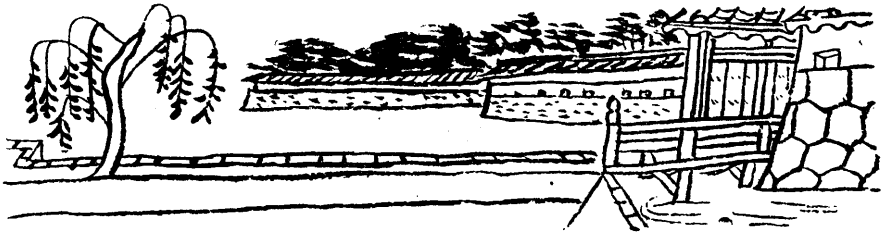
第　百　號

「太棹」創刊號の表紙
岡本癖三醉氏筆四色版



太棹 第百號目次

殊勳甲の寢床太夫……濱村米藏…(四)
近事雜感……小泉蛙鳴…(七)
呂昇の思ひ出……久保田金僊…(一〇)
四ツ橋文樂座初見物記……齋藤拳三…(一三)
百と言ふ數……坂本猿冠者…(一五)
詑びごと……平山蘆江…(一六)
ラヂオ淨曲漫評……金王丸…(一八)
齋藤氏に應ふ……近江淸華…(二一)
『のろま』の語に對する空想……中山德太郎…(二三)
百號に達した喜び……田中煙亭…(二五)



『かさね』のこと……樂々翁…(二六)
讀者の領分……森三好邦治生…(二七)
『太棹』總目次(一)……(二八)
堀川の『何と言葉も傳兵衛』……岡田蝶花形…(三〇)
會報……若手會・三華會…(三〇)
百號を迎へて……富取芳河士…(三一)
兼崎地橙孫氏より……(三一)
太棹社彙報……(三二)
當座帳・其他……
編輯後記……芳河士……
表紙・カット……宮尾しげを……

殊勳甲の寢床太夫

濱村米藏

私はある琴の演奏會を聽いて思つた。尤も琴のことは一向分らない。ただその演奏會を聽いたあとで、この文章を書き始めたので、琴の話から始めるだけである。澤山あるプログラムの中で、美しい大小のお嬢さんに、もうさびのついた昔のお嬢さんも交つて、琴が二十箏（？）あまりで『千鳥の曲』を合奏した。それは能く練習されてゐて、實に一絲亂れぬ見事な演奏であつたから、聽いてゐて非常に氣持が良かつた。が、どうも、當然この曲が表現すべきであらうと想はれる、浦邊を啼き渡る千鳥の閑雅といふか、靜寂の味といふかさういふ一種の寂しさは、ちつとも出て來なかつた。却てチドリ・オン・パレードの絢爛さがあつて、あれではきつと須磨の關守は不眠症になるだらうと想像された。

そこで、私の感じたことは、この有名な古曲は琴と尺八でせい〳〵三四人の程度で演奏するのが、最も効果的なものではないか。同時に、琴を十箏二十箏と集めても、音樂として量感が大きくならないし、豊富にはなり兼ねる。結局琴は日本の座敷で徐かに聽くべきもので、大きな講堂には不適當なのではあるまいか、といふやうなことである。

日本音樂として、新しい境地を拓いたといはれる宮城道雄氏の『谷間の水車』のやうな作品にしても、あれが琴でなければ到り得ない新領域とは考へられない。琴でもかういふ描寫が出來るといふまでで、あの世界ならピアノやヴアイオリンの方が、寧ろ早手廻しではないかといふ氣がする。

○

何故、右のやうな素人考へを竝べるかといふに、古典藝術の取扱ひは、改造保存共に容易でないといふ一例に他ならない。

非常時局の形相の一つだが、近頃は一しきり歌舞伎滅亡論を聽かされた。歌舞伎と義太夫とは切つても切れぬ姉妹關係があるから、本誌の讀者諸賢も多分御承知であらう。かういふ宏大な傳統藝術になると、古河に水絶えずの諺通り、さう無暗に滅びるものでない。日清戰爭の時も然うだし、日露戰

爭の時も然うだし、それ以外にも歌舞伎の滅亡を說かれたことは、隨分いろ〳〵あるけれど、何處かで我々の生活と交渉を持つてゐて、その度毎に却つてその底力に驚かされるのが落ちであつたやうだ。

しかし、古いものが、新しいものに代りあつて、死滅するのは止むを得ない。殊に藝術は生きものだから、不死身といふ譯には行かない。いつかは生者必滅、會者定離の悲壯を迎へなければならない。だが、生きものである限り、出來るだけ其の命脈を勞はり、後世へ傳送するのが、今日の我々の義務である。それが能樂や歌舞伎や義太夫操芝居のやうに、我々の祖先が限りなく愛撫して、創造した藝能なら、無論のことでなければならない。

○

只その擁護保存の方法が問題である。

歌舞伎や義太夫淨瑠璃、その不可分の操芝居を、どうしたらいいかといふ問題は、なかなか厄介で、簡單に云へない。歌舞伎の保存を說く場合、極つて引合ひに出されるのは能の現狀である。けれど能の場合と、歌舞伎や義太夫操芝居の場合は、一緒には論じられない。早い話が、能は干物(ひもの)になり切つてゐるのだが、歌舞伎や義太夫はまだ醒い生乾しの程度だから、うつかりしてゐると腐つて蛆が湧いて、まるで手の着けられないやうになる危險がある。だから、いつそ面倒臭いから捨てて了へといふ、保建一點張りの議論も出る次第である。その證據には、能に對しては、あんなものは滅して了へといふやうな掛聲が現はれないのでも判る。能には完成以後三百年前後の封建時代の室園ひが續いて、丹念に燻製工作が行き届いてゐる。ところが歌舞伎や義太夫操芝居は爛熟してから間もなく、前者とは反對に烈しい時代轉換の酸化へ曝露されて了つた。そんな譯だから、能と違つて、取扱ひに手心が必要で、それも至極デリケエトな關係にあると見るべきである。

現在文樂は國庫から金を貰つてゐるらしいが、それをもつと積極的にして、國家が保護するといふ方法も殘されてゐる。が、この事變の目鼻がつかない限り、歌舞伎や文樂どころではないから、この方は餘り頼りにしてはならない。

さうなると、多少酸つぱいにしても、歌舞伎や義太夫や操芝居の生乾しを味讀し、消化し得る者が、自分達の食卓を飾つて、時にはその同志らしいのを見つけ次第に憑めて、その獨特の風味を鑑賞したり擁護したり保存したりするより仕方がない。だから、その意味で、一口に云へば、歌舞伎や義太夫に取つて、これに限るといふアンは勿論救ひの神だし、そこまで行かなくつても、多少でも分る位でいい、同好者の一人でも多ければ多い程いいといふことになる。

○

だが、カロリーがどうの、ヴィタアミンＡＢＣがかうのといふ世の中だから、クサヤ擬ひの干物が敬遠されるのが當然

である。一寸乙だと手を出しかかつても、映畫や漫才に較べて、お値段からも歡迎されやう筈はない。で、云ふまでもなく一般大衆は仕方がないとして、有閑階級（今はこんな言葉がをかしいのだが）やインテリ層から、味方を獲得しやうにも、又これが歌舞伎や義太夫は能のやうな工合に行かない。

極めて卑近な話になるが、能だと、腹消化に素謠をやらうといふ人も出さうである。といふのは、鼓がなくとも、素謠なら聲樂として成立つし、拙いなりにどうにか恰好はつく。歌舞伎は別問題だから預るけれど、義太夫はそう安直に行かない、操芝居の人形になれば歌舞伎と同じで尙更複雜になる。義太夫のサワリをやつても、どうも消化運動にはなりさうでない。それにサワリだけにしても、三味線がなければ、湯ぶくれ都々逸の流儀を脫し得ないことにならう。『コレハモロコシカネキンザンノフモト』と唸れば、旨からうか拙からうが、少くとも『猩々』を知らない男を脅かし得るが、これが『ソリヤキコエマセヌデンベエサン』と來ると、生乾しの悲しさはどうにか傳兵衞さんなる者を、搔口說くだけの氣持を出さないことには、糠味噌の方は兎も角聽手が納得しないに相違ない。

笑話休題、拙の長談義は近所の迷惑だ。いい加減にもう締め括りをしなければなるまいが、要するに太棹藝術のファン、準ファン、準々ファンは容易に得難い。思へば明治時代の女義太夫のファンたるドウスルレンなる者、今何處にありや。居るのが分つたら、此方から出かけ行つて、この晩秋の夜長を語り明したい位のものである。從つてこの『太棹』の讀者諸賢の如きは、義太夫にあつては至寶中の至寶、戰士中の戰士、正に一騎當千の武士であらう。失敬ながら（決して侮蔑の意味ではありません）きつと寢床太夫も多からうが、その古典藝術に對する熱情は、非常時日本の金の茶釜に於けるが、如く、義太夫に對する最後のトーチカであり、武漢三鎭である。按ふに、寢床太夫の諸君が、總て殊勳甲とは行くまいが假りに義太夫藝術陷落の日に當つて、若し爆彈三勇士を必要とするならば、きつとそれは寢床太夫の中から現はれるだらう。おまけにまだ義太夫は武漢三鎭のやうな脆弱なものではなささうであて。とすれば、所謂爆彈三勇士の使命は遠く長い、愈々益々心臟をトーチカにして自重加餐、古都義太夫の爲に奉公されることを望む次第である。

祝百號

國米

平野一昇
武杉玉
兼山榮
廣陶玉
廣岳
西本
西玉
紫

近事雑感

小泉蛙鳴

豊澤松太郎師逝く

昭和三年の夏、文樂の東京公演に際し、その當時文樂の魅力に惹き込まれたばかりの私は古靱太夫の淨瑠璃に夢中で朝太夫の淨瑠璃を許容する氣持にはどうしてもなれなかつたが松太郎師の三味線には唯々感激させられるばかりだつたので淨瑠璃を聽かずに三味線を聽く方法として、開放された扉の近くのソファに身を横へて「酒屋」の三味線　陶醉したことがある。

次に忘れられぬ印象は喜の字の祝に於ける豊澤會で聽いた「小鍛冶」の演奏である。

洗錬され盡して淡々水の如き三味線の調べの裡に名人の能を觀る如き崇嚴さを感じて唯々頭が低るばかりだつた。

亦、師の私生活は豊澤芳太郎君を通じて色々聞いてゐたが私も一度面接の機を得て、藝談の一節なりと拜聽したいと切望し乍ら御老體に支障を來す事を恐れて遠慮してゐる内に、遂に私の熱望も水泡に歸して仕舞つた。

然し芳太郎君の厚志で七十七歳の折り書いて貰つた色紙が殘つてゐるのはせめてもの慰めである。

私は誠に申譯の無いことであるが、師の告別式の時間と私の伯母の初七日の法要とかち合つたので殘念乍ら、御燒香に參上出來なかつたので、形見の色紙の前に香を燒き靜かに合掌して師の冥福をお祈りした。そして

御高齡だつたとは云へ、師の御逝去は義太夫界にとつて非常に大きな不幸を與へたことをしみ〴〵考へさせられた。

新義座を聽く

文樂のつばめ太夫、南部太夫が中心になつて新義座を組織した事を新聞で知り、野澤勝平が物凄い位、猛烈な稽古を付けてゐるといふ佳話を耳にし、是非一度は拜聽したいと思ひ

乍ら機會に惠れず、つぼめ太夫が文樂へ復歸して織太夫を襲名し、南部太夫一枚看板となつた今日始めて聽くことが出來たのは如何にも皮肉である。

最近私の親類緣者に腦溢血で死亡する者が續出し、その治療看護お通夜葬式等に心身を極度に疲勞してゐる上に、十七日にも仁壽講堂へ出馳ける直前、同行する豫定の友人の伯父が危篤に陷つたとの通知に接し、トタンに心の平衡を失ひ、淨瑠璃を聽くそれとは甚だ緣遠い陰鬱な心と硬はばつた姿態で入場せざるを得なかつた。

ところが叶美太夫勝芳の「油屋」の後半を聽き、後挨拶で全員の元氣な顏を見、陸路太夫德若の「布四」を聽いてゐる內に、少年時代から顏見知りの越名太夫勝芳綱延等の成長と彼等の餘りにも熱心なる努力に接して何時しか肩の凝りがとれ、心の憂さが消し飛んで朗らかな氣分になつてゐる自分を發見して我乍ら吃驚した。のみならず最も聽きたくもあり、最も不安を感じてゐた南部太夫勝平の酒屋を聽くに及んでは唯々無性に嬉しくなるばかりであつた。

最近亡くなつた私の伯母は、越名太夫時代から南部太夫のファンであつた。私も嫌ひではないが餘りにも一本調子な金屬性の美音と何處かくすみ過る、換言すれば艶物語りのレツテルを帖り乍ら、土佐太夫亡き後の艶物は自分獨りで引受けるといふ覇氣に缺けてゐる點、將來を案ずるものがあつたが久振りで聽いた南部太夫は私の豫想より超かに進步してゐるので唯呆然たるばかんなりを感じさせられた。

即ち一本調子の南部太夫が、技巧に凝り過る位、節にも詞にも研究の跡歷然たる淨瑠璃を語るといふ事は、如何に彼が多難なる途を步いたか、而もそれに負けずに努力して來たかを證明してゐる。

慾を言へば宗岸に比し半兵衛が語れてゐない憾みはあるが、餘りにもポピユラーな「酒屋」を聽いて最近これ程感激したことはなかつた。私はこの「酒屋」を生前南部太夫の藝を愛好して居た伯母と、醉へばお園のさわりを口ずさむのを常癖とし乍ら、伯父の臨終に走せ參じた爲めに好機を逸した友人に聽かせなかつたことを返す〳〵も殘念に思ふ。

仕事の都合で、越名太夫と最近迄大隅太夫の膝下に居た隅榮太夫の語る「戾橋」を最後迄聽かずに、私は仁壽講堂を飛出し、恐らく徹夜させられるであらう仕事場へ急いだが、途中の自動車の中で感じたことは、南部太太はもう立派な座頭の貫錄を供へたので、前記の私の心配が解消された悅びと、寡兵の新義座を此處迄仕上げた野澤勝平の懸命なる努力に對する敬意であつた。伊達に勝平の頭髮が薄くなるんぢあない。一本〳〵の拔髮に尊い犧牲的精神が含まれてゐることを座員一同が忘れてはならないと思ふ。

尙特筆すべきは新義座の聽衆である。素淨瑠璃の會に珍らしく社交の爲めに來場してゐる人が殆んどなく、聽衆全部が淨るりを愉しみ乍ら聽いてゐる狀況も嬉しき限りである。

百號を祝す

昭和四年十月飛行館で富取氏から寄稿を依頼され「義太夫人形座の舞臺裝置に就いて」といふ原稿を太棹誌上へ發表してから十年、最初の原稿が飛行館の大道具の怒りを買ひ、舞臺裏で毆られそうになつたのを手始めに、「鬼界ケ島の舞臺稽古から」の筆禍事件等相當私自身も富取氏も迷惑を感じた原稿を書き散らしたものである。然し經驗が淺く、向ふ見ずで生意氣だつたが、人形淨るり界の進歩を望む爲めにのみ原稿を書き續けた自分の眞劍な姿を回顧して、一沫の懷しさを感ずる。

最近は浪曲の批評等でお茶を濁してゐるので、安藤君や古靱太夫氏から大分お叱りを被つたが、此處等で何とか立直りたいともがいてゐることは事實である。

死病を心臟の强さで克服した富取氏は遂に「太棹」を百號迄繼續したのである。

義太夫雜誌發行の苦心は筆舌に盡せぬものがある。その辛苦を押切つて百號迄續けた富取氏の所謂心臟も相當のものか？

よくも續いたものである。

然し續いた以上、より存在價値を確立する立派な雜誌にしたいものである。

百號發行に到つた富取御夫妻の御辛勞に對し心から敬意を表すると共に今後の發展を祈つて擱筆する。

祝百號

日本大阪因會

男女 太夫三味線一同

事務所 大阪市住吉區長峡町四七

村上卯之吉方

祝百號

文樂座

大阪市南區四ツ橋畔

電話（南）三〇三二番 四七一八一八番

呂昇の思ひ出

久保田金僊

先頃、花柳章太郎が獨立興行として村松梢風氏原作の『呂昇物語』を明治座で上演したとき、昔しの思出を雜誌『舞臺』に投稿してをいた。其後名古屋の伊藤次郎左衞門氏（松坂屋前社長現在相談役）に面會の際、談たま〳〵呂昇に及び、更に同氏の呂昇物語を聽いて聊か得る所あつたが猶、疑問の存する點なきにしもあらずである。

名古屋時代の呂昇は長者町（盛榮連）の義太夫藝妓で、妓名はやはり仲路といつてゐた、けれども一流どころではなかつた。要するに義太夫藝妓であつたから、特に趣味のお客にのみ呼ばれてゐたことは致方がない。座敷も快活でなく、どちらかといへば沈靜の方であつたから賣れツ妓の部に這入らなかつた。それらが原因したか或は他に事情があつたか大阪へ出て專門的に義太夫をミツチリ稽古して遂に大成名聲を博したのであるが、彼が大阪へ出る動機については村松氏の作によると、悲劇の反動のやうである。ローマンスの主人公たる伊藤邦三郎といふものが實在人か其點がよくわからない。しかも原作では大津屋といふ呉服屋の苦主人で資產家と書いてある。松坂屋の伊藤氏はこんなことを云はれた『劇中に私が出るそうですネ、私は呂昇をよく知つてゐましたが、その以外に何の關り合もない』當然のことで又混同されやすい。その上、呂昇の仲路は伊藤家の

借家に住まつてゐたから、益々不審議に思はれる。長者町邊には伊藤家の借家が澤山あつて、彼の借りてゐた家は無論存在してゐるが、長者町筋の小田原町を北の方へいつた右側の路次の三軒目であつた。小奇麗な、サッパリとした家である。そして妓籍仲間では現在有名な西川流の舞踊家西川小染（前旭屋小染、料亭河文の未亡人）及び西川長吉（前、大蔦屋長吉）などである

最も伊藤氏は仲路と知り合ひの間柄は云ふまでもなく、度々座敷へ呼んだ其後彼が大成して名古屋へ所謂故郷へ錦を飾つて來た時などは可なり後援をして引き立てた、夫れ以外何等關係はなかつたことは伊藤氏の言葉でわかる。伊藤氏の紹介で自分は數回呂昇に面接してゐる。村松氏原作の伊藤邦三郎はどうやら假空の人と思はれる。自分の知つてゐる範圍では當時の赤新聞であつた扶桑新聞社（嘗て青柳有美氏在社、名古屋美人の月旦を連日紙上に麗筆を揮ひ爲めに紙價を高からしめた）主幹の某が情人であつたやうに聞ねてゐる。東京でもある人とうわさに上ぼつたことがある。原作の伊藤邦三郎のことは暫時調べるまでそつとしてをいた方がよいかも知れない。

兎に角、彼は美貌の持主ではなかつたが、色白で圓顔の肉體美であつた。彼の美聲は天才で、其上大阪に於ける血の出るやうな研究は慥に女義界の重鎮となさしめた勉強心によるものと特筆すべきである。後年、東廣、末虎の二元老が加はり、喜昇、房勝の若手も彼の一座の花と飾つて愈々聲價を揚げたのであつた。

上段カットは久保田金僊氏筆

四ツ橋、文樂座、初見物記

齋藤拳三

十月十五日、十六日の兩日、大阪四ツ橋の文樂の本城を始めて見物した。地下室の無い小じんまりした二階建の小屋である。

淨瑠璃芝居を味ふ專門に作られた小屋だけあつて、吾々の樣な東京人で、盛夏のむし暑い季節に駄々廣い歌舞伎や東劇で、毎年人形芝居を見なれた者にとつては、全く爽冷の好期に樂々と聲の響き通る、本場所で聞く人形芝居は全く別天地の樣な感がある。

文樂上京の人形淨瑠璃地獄の感が全く無い、私は人形淨瑠璃愛好者に限り、つくゞ〳〵大阪人の幸福を思つた。

特に太夫の床はすぐ見物席の前にあつて、丁度吾々が寄席の高座に持つ親しみと云つた感じが、太夫にも人形使にも持てる、これも嬉しい事の一つであつた。

唯一つあきれるのは、場内唯一の食堂の南一濕泉料理の不味で高い事である。私は金一圓也のお膳と、金五十錢也の親子丼を食べたが、此れは田舍料理で全く閉口である。商賣上手の松竹にも似ず、東京の樣に場内に投書函の設備も無いから紙上から改良を希望して置く。

狂言はそんな譯で、第一の忠臣藏から第三の契情倭莊子まで、三時から十時廿分まで見物しても何等の疲勞も感じない。

賣店では番附を賣つてるのが東京と變つている、此れも吾々には心持ちよい。

二日共、太夫、三味線の連中はあつたが人形使ひの連中は無かつた。出使ひも東京程演らない、此れも結構である。

大序は和泉の直義、長尾の師直、源、の顏世竹太夫の若狹常子の判官である。

人形は玉幸の師直　榮三郎の若狹で『早いわ〳〵』を演つて居る、此れは歌舞伎が此の頃演らないだけに殘したい。

殿中は大隅、廣助、師直を玉次郎が使つて居る、懷しかつた。然し判官を追ひかける件は代役である。

土佐太夫の說によると、若狹之助は相當腹のある人物で、鶴

ケ岡であれ程怒つても歸宅して本藏に相談する餘裕のある人、判官は思はず拔刀したが、お家斷絶と云ふ杞憂の爲に師直を打ち損ずる人、と云ふ點に力點を置く可きで有ると云ふ。一度此の人の健在中に三段目を聞きたいものである。

四段目は駒太夫、清二郎、此の人の口に合はぬものらしく不出來である。血壓亢進の爲當日は「力彌御意を承り」から文字太夫が變つてしまつたが、かへつて後半の方が面白かつた。

友次郎の說によると四段目の判官はすつかり腹の出來てる人で、石堂とは相許し合つた仲で、上使受が濟むと思はず『御酒一つ』と親友らしい言葉使ひが出る。藥師寺は尙、むかついてくると云ふ腹でやる可きだとの由。亦絃としての難所は石堂の『緩々として』テンチン『立歸る』のチンをほろりと一掬の涙を落す樣に彈くデリケートの呼吸だとの由である。

此れも此の人の健在中に聽きたいものである。人形は榮三の由良之助が相變らず美事な他、紋十郎の判官が、東京所演より數段の進步のある事を特筆する。

二ツ玉は和泉太夫、重造である。此の人の口に逢はぬものらしい。

一體私は五段目の人形芝居の演出には大反對である。與市兵衞はあの一生懸命の場所で何故「松がへ」なんてシャレを云ふのだらう。

あの惡ジャレは、彥六座の方から樂へ流れ込んだものらしい。亦何故定九郎は原作通り、オーイ〳〵と與市兵衞を追ふかけて來てユスリにならないのだらう。あれでは金を取る爲に與市兵衞を殺すのではなく、丸で殺人道樂とでも云ふ男である。亦何故人形は仲藏改良の黑紋附の着附だけを踏襲するのだらう。

あんな五段目ならば時間節約の今日拔いてしまふ方がいゝ。

裏門、俗に「落ち合ひ」と云ふ、此れは源太夫、吉彌である。久し振りで吉彌を聞く、結構である。人形は何時もの榮三文五郎のおかる勘平にめずらしく門造が伴內を使ふ。

六ツ目は身賣りが錣太夫、新左衞門。腹切りが津太夫、綱造。劇場の關係かどれも東京で聽くよりも渾然として居る。

人形は小兵吉がおかやを使つてるが、四段目の石堂とは別人の感で旨い。門造の鄕右衞門も非常な傑作で『見後る涙』の件で、人形獨特の足拍子を入れて、おかやと鄕右衞門と二人で乘るのは人形淨瑠璃愛好者の心を打つ。

又此の鄕右衞門は、政龜の千崎と二人で『おとなへば』の件を門口で二人で正面向に一列に極る、丁度歌舞伎の菊畑の虎藏と智惠內、或は車引の梅王と櫻丸の樣な意氣である。

人形は斯う云ふ人形獨特の技巧を丁寧に研究復活してこそ存在價値がある。

七段目のかけ合は大隅の由良之助、伊達のおかる、呂太夫の平右衞門、叶の糸である。

T氏の說によると、現今語り方のくずれた代表的なものは

七ツ目のおかるださうである。

攝津大掾などは田舍娘の『はや廓なれて』と云つた情が、いかにもあふれて居たさうである。今のは丸でお姫樣か夕霧太夫の樣だと慨歎して居た　一流の太夫の一考を煩したい。

人形は折角榮三が由良之助を使ふのに『おのれ末社ども、めれんになさで』の件など省略されてしまつて見所が少い。

淡路の八造と云ふ人の考案による、此件で手拭を人形に使つて入る由良之助などを空想して居る吾々などには永遠の夢である。

次が此の度下阪の眼目、古靱太夫初役の玉藻前旭袂の三段目である。

古靱太夫の說では『表から演れと言はれて仕方なく引受ましたが、私は此の淨瑠璃はきらひです。前に餘り多くの大家が演りつくして居ります。一層演るのなら、增補のでなく原本の方で演ればよかつたと後悔して居ります』と。師の說の如く、現今の道春館は寬政四年（寶歷元年か）浪岡橋平、淺田一鳥、安田蛙桂、合作の原作の二段目にあたる。此の方では道忠館の段となつて居る。

二段目の金藤次は全然立役で、二段目で姫の首を打つて歸つてしまふ。後に不如歸の歌の書いてある扇面を殘して行くので、桂姫の實父である事が解る。三段目以下は其功によつて郡代となつた金藤次は、王子の惡事を諫めながら鬱々として本意なき日を送る內、益々つのる惡業に實子を殺した實意を明して自害して王子に諫言する、王子は殺生石となつて、玄能和尙となつた采女之助の爲に得度せらるゝので終る。文化三年に梅枝軒、佐川藤太によつて、三段目一場で金藤次だけは解決のつく樣に改作せられたものである。

成程上品過る位な古靱太夫の藝風では、現作の方が柄にある樣である。然し御當人が惡聲と謙遜して居る程前半は惡くない。後室も二人の姫も中々味がある、技巧的な哀寂感をよく出して居た。淸六の糸も、いかにも淸六式に彈く點が將來性を思はせる。

人形の方は大失敗である。第一玉藏の金藤次は最初から全然底を破つて居る、後室の物語りを聞いてから、桂姫ばかり見てるのは失敗である。義太夫が愁で語つてないのに、愁の思ひ入れをしたら、人形芝居は根本からこはれてしまふと思ふ。紋十郎の初花姫も『立聽くとも』で一寸出るだけなのは大いに惡い。あの場合、後室と金藤次の物語りを兩方の居間から姉妹が同時に立聽きすると云ふ繪面が、あくまで人形芝居の約束であるべきはずである。人形使ひは義太夫の文句の意味だけでも、太夫や三味線から聞く可きであらう。

前に桂姫が戀わずらひをして居て、初花姫を采女之助と思ひ違へる端場が附いて居る、文字太夫は吉左の糸でよく語つていた。第三の契情倭莊子、蝶の道行は、安政二年三月の淸水町濱芝居以後、埋れて居るものだけあつてつまらないものである。

百と言ふ數

坂本猿冠者

百と云ふ數は、ものゝきまりの數だ。年にすれば百を以つて一世紀とする。

人間の年齢は七十歳が古來稀れと云はれて居る、故大隈侯爵は百二十五歳說を主張されたが、八十五歳で逝去された。僅に棚橋女史が百歳を迎へたゞけで、今百歳を數へる人は日本中を探しても幾人もあるまい。

狂言百種、淨瑠璃百段と一口に片づけてしまへばなんの雜作もないが、一狂言、一淨瑠璃を百種數へ上げてみろと云はれたら速座に數へ上げるものは恐らくあるまい。

個人經營の雜誌として百號まで永續させるのは並大抵の努力ではない。然かも特種の雜誌で、百號を迎へる事が出來るのは、富取氏が孜孜として倦ざる、斯道の爲めにコツ〳〵とつまれた其の努力の結晶と云つていゝ。

誌友としての私は「太棹」百號を心から祝福して、前途倖多かれと祈る者である。

祝百號

日本帝都義太夫因會

男子部

祝百號

日本帝都義太夫因會

女子部

詫びと

平山蘆江

富取さん、あなたは傑い人です。私は今、改めてあなたに敬意を表します。

あなたを私が知つたのは、たしか三宅孤軒氏の紹介だつたとおぼえてゐます。義太夫の雜誌を出したいと云ふ事だから手傳つてやつてくれと、三宅さんは私への手紙――だつたと思ふ。――を書いて、富取さんを私の家へさし向けられました。その時、あなたは傘屋さんの機關雜誌を編輯してゐるが、ある人に勸められて、片手間に「太棹」といふ雜誌を出したい。片手間とは云つても、實は大に力を入れる用意があるので、片手間と云つたのは其道についての智識がまるきりないから、どの邊まで踏張つてやればよいのか、只、義太夫の雜誌が、日本に一つぐらゐあつてもよいのではないかといふ心持だけで、一應乘り出して見るのだから、どうぞ手を貸してもらひたいと、さういふ意味の事を、あなたは仰やつたと覺えてゐます。そこで私は、あたまごなしにあなたをやつつけました。これはたしかに覺えてゐる。

義太夫雜誌が日本に一つぐらゐあつてもよからうといふ考へ方は一應尤もだが、今までになぜなかつたか、幾度か興つて而も、片つぱしからつぶれたのはなぜかを考へる必要がありはせぬか。

兎もあれ、出すときめたのなら、それでもよいが、素人義太夫のための雜誌か、玄人義太夫の爲めの雜誌か、只の評判記式のものか、研究的態度をとるつもりなのか、研究的態度では賣れるめどがない、評判記式のものなら、提灯持をせねばならぬといふ不愉快を忍び得るか、玄人のためなら恨まれるだらう、素人のためならものもらひ式にあらはれるのを覺悟せねばなるまい。どつちにしても、ムダな事だ、とてもやれるものでなく、やつたところでムダ骨折です、ちよろつかに乘り出したら、富取芳河士の男を下げるばかりですよ。と、何でもめちや〳〵にまくしたてたと思ひます。

ああまでいふ必要がどこにあつた事だらうと、あとで我れながら冷汗が出ました。あなただつてたしかに顏色が變つてゐた。不斷は萬事よろしいやうに式で通してゐるくせに、何か虫のゐどころがわるいと、ヂヤン〳〵まくしたて

て、自分で自分の屁理窟をとめ切れなくなる性分を私は持つてゐます。この性分のおかげで、いつも人様にさからひ、世間に憎まれ、一向出世らしい出世が出來ないといふ私なんです。丁度、私のわるい性分が、あなたに向つて眞正面からとび出したのでした。

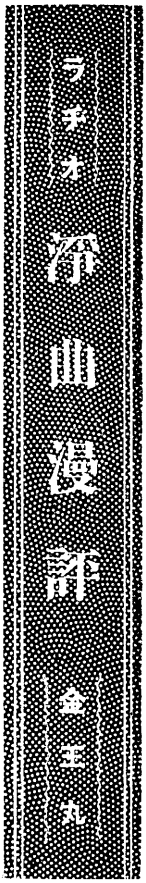
あまりの事に、あなたは呆れかへつて、私の家を出てゆかれました。そして、而も「太棹」といふ雜誌はその次の月から私の家へも配本されました。

こんな雜誌を出したり、こんな雜誌に骨を折つて何になるんだといふ心持で、私は「太棹」を手にとりましたが、あまり罵倒したために、「太棹」の發育如何は私に大きな責任でもあるやうな氣持で、毎號、何となしに待つ氣持が出はじめました。つぶれやしないか、つぶれやしないかといふ氣持です。正直なところをいふと、今につぶれるよといふ心持が三分、いや四分ですか、つぶれないやうにと念じる心が六分といふ風でした。

が、私の不安も、私の罵倒も、結局、大きにお世話といふわけでした。「太棹」を百號までつづけたあなたは、全くえらい人です。百號までも「太棹」がつづく間に、私とあなたと顏を見合せたのは、たつた三度か四度だと思ひますが、あなた自身の「太棹」發行に對する苦心の次第は、間接ながら、ちらほら耳にしました。雜誌の上で知つた事ですがあなたはたしか、九死に一生を得るといふほどの大病をされた事もあるらしい。その外いろ〳〵な苦難が、あなたの身邊に屢々往來してゐる樣子でしたが、何があつても、何が來ても、結局、「太棹」は百號まで來たんです。雜誌を百號までつづける——只、それだけの話ですが、事實非常にむづかしい事です。それをあなたはやりとげました。はじめに私があなたの計劃を批難した心持の主眼がどこにあるか、そんな事は別として、兎にも角にも、「太棹」を百號までつづけ得たといふ事は充分尊敬すべき努力です。

百號までの間に、あなたの身邊にいろ〳〵の苦難があつたのを堪へ通したあなたの忍耐もさる事ながら、それよりも、私が心ひそかに感心してゐるのは、ここまで來る間には、餅で頰端を叩くやうな果報が、幾度か、あなたを糠よろこびさせたにちがひない、とそれを思ふのです。苦勞はこらへれば好い。空虛な嬉しがらせを受け流して、すつぽかされても怒らず、御都合主義に引かからず、雜誌「太棹」の品位を、こゝまで保つて來られた點に、一層敬服するのです。

何しろ、天狗中の大天狗を向ふにまはして十年（以上になるでせうね）の隱忍と努力をつづけられた富取さんに、此機會を以て十年前の馱辨を詫び、尙ほ此上、斯道への盡瘁をいのりますが、それよりももつと〳〵私が望んでやまないのは、約そ義太夫ぶしにいそしむ人たちが、富取さんの立場を充分認識して、義太夫ぶし振興のために、富取さんを尙ほ此上にも聲援していただきたいといふ事です。



大阪女義　〔九月五日〕

加賀見山舊錦繪

＝長局の段＝

お初　竹本住龍
尾上　竹本雛昇
絃　豊澤小住

男太夫のそれの如く、女義も、さすがに上方のは、相當に聽かれる、といつては悪いが。今夜の住龍さんや、雛昇さんは、いはゆる中堅といつても若手、まだ大家の部では無い。それでも、立派に長局を聽かせて呉れるのである。跡見送りて……から、錠口さしてまで——主おもひのお初の心意氣は勿論、年端のゆかぬ女性の、シカモ、それが、シツカリ者である處を、充分に顯はしてゐて、案外の出來である。一日の長ある筈の雛昇さんの尾上がまた、それだけの品位を保つて、堅い決意をしんみりとした語り口に會得させる、豪いものである。絃の小住さんは今では堂々たる大家、お師匠さん株として、よく引締めて語らせてゐた、といへやう。

大阪女義　〔九月十三日〕

假名手本忠臣藏

＝山科の段＝

竹本綾助
絃　豊澤小住

九段目なんてへものは、さうザラに語るものぢやア無い、といふのが、吾等の常識である。岡鬼先生などに言はせると今の津太夫の九段目なぞ問題で無い、といふ事になつてゐる。それを女の人が語らうといふ、勿論前半だけではあるが……まづいはゆるハンデーキャツプで聽く事になる。で、この綾助さんのだ。まア一トロに結論を言つてしまへば、無理であつた。戸無瀬と小浪とお石、此の三人の女性の語り分けが難かしいのだ。五百石取りとはいへ、家老職の奥方である。それから、深窓に育つた處女である。まさかに、世話女房の戸無瀬にもならず、カフエーの女給上りの小浪にもなつては居なかつたが……唯だ、お石は可かつた。相當の點が入れられるお石であつた。近頃のお石であつた。第二放送といふので演し物に苦心した結果が、かうした義太夫として損をした結果になつたものといふより外は無い。女子因會の幹部ドコも位負けといふ落になつたのは氣の毒である。

文樂若手　〔九月十五日〕

碁太平記白石噺

＝揚屋の段＝

竹本源太夫
絃　野澤吉彌

源太夫といへば新らしいが、源路太夫

と聞くと、相當古い文樂のモロ〳〵であつた。又た此の人ほど、先代を思ひ出させる人も少ないだらう。我等先代はこと〳〵く最負であつたが、まだ多望の前途を以て逝りてしまひ、我等をして、凋落文樂のわびしさを思はせたものであつた。今、何もこんな事を言ふことも無いが、實は、この源太夫氏、あまりにも進歩の跡の遲々として、未だに、昔日のモロ〳〵の域を脱し切れぬのを齒痒いとおもふからである。當夜の語り物『白石』は悪くない、が、宮城野が、如何にしても全盛宮城野花魁とはおもはれず、肝腎のサハリでも、時々トテツもない聲を出して驚かせたり『首尾よう年を勤めたら』や『色や浮氣をたしなんで』など、モ一つ何とか味を聽かして貰ひたかつたのである。しのぶはそれでも或る程度まで可憐さが出て居たのを頂く。絃の吉彌君は筋もよく達者な人、カケ聲もウルサイほどで無くて好かつた。

東京床語　〔九月二十日〕

一谷嫩軍記　＝熊谷陣屋の段＝

豐竹巖太夫
絃　豐澤猿藏

この大、それた語り物、陣屋の放送を前に、我が巖太夫事藤田蛙水氏が、某新聞記者に語つた處によると『日の本は大和神樂の始めより……』（世の諺に曰くといふ）と前座の落語家に聽いて來たやうな事で、先づ女義太夫を盛んにする事が、義太夫の衰勢を打開する唯一の方法だとおツしやり、更らに、文樂座の連中と交際してゐるのは、東京では自分一人である……といふ途轍もない怪氣焔である。さて選りも選つたり、熊谷陣屋を巖太夫が、ヘエーと仰天する位なもの、尤も青年歌舞伎のチョボとして千代坊の我當あたりを動かした事はあらうが、義太夫としての陣屋を、さう甘く見て貰ひたくないものとおもふ。ノツケの熊谷の出からひよろついてゐたのは確かで相模の『あなたは藤のお局樣』――など、スラ〳〵と言つて退けてゐるなど呆れるばかりの研究である。全體陣屋のドコを聽かせるおつもりだつたか、細かいテツや、届かぬ聲や、鼻聲のごまかしやは我慢しても、大體に於て『熱』といふものが皆無である、イヤ、その熱を聽かせる、表現が、出來ないのである。批評に及ばざる品物であつた事勿論で、やはり、長唄なり、常磐津なりと兩床で、チョボ臺に乘つて納まるか、御自慢の淨瑠璃小唄とやらに浮身をおやつしになる外はござるまいと存ずる次第。失禮無罪。猿藏氏の絃、とかくの評なし、唯だ、內心苦笑しつゝ彈いてゐたであらう事を想察する。

文樂中堅　〔九月廿九日〕

一谷嫩軍記　＝組打の段＝

竹本相生太夫
絃　鶴澤道八

十日ほど前に陣屋が出て、今度は組打といふ、およそ物事が逆である。文樂中堅をすぐツて明治座の人形芝居、近頃の成功を收めたその樂の翌日で、東京出身

の相生氏が、置き土産のやうな放送、結構な事である。第二放送の語り物として最近、新内だの、常磐津などで、この一の谷の組打は盛んに演ぜられる、少し微苦笑ものの感がしないでもない。さてその出來は、と開き直るほどの事もなく、身分相當に聽かせられたといへやう。尤もその大半は、老巧道八師の絃によつてゞあるが、これも亦た我が老師を煩はすほどの物でも無い。明治座の妹脊の山の大判事が、向うの定高と雛鳥（織太夫と伊達太夫）に食はれて、呂太夫の久我の助と共に、どうやら見物をだれさしたといふ評判もあつたが、今夜の相生は、出し物の當を得てゐた點で、さすが、といふ事であつたのを祝福しておかう。

東京女義　〔十月五日〕

戀女房染分手綱　＝三吉愁歎の段＝

竹本越駒
絃　鶴澤紋敎

此の處、東京の女義太夫御連中、中々にはり切つてござるらしい。越駒紋敎のコンビもやゝ久しく、一時ダレ加減だつたのが、このごろは又た大緊張とある。さて、當夜の重の井はどうであつたか。先づ、特筆して賞めてよいのは、三吉の可愛い事であらう。アノ柄で、といつては惡いが、とても、男性の太夫には出ない聲を出しての三吉、可憐そのものであつた。御乳の人もよし、品位も相當に出てゐて、愁ひもよく利いたのは豪い。「お乳ははツと氣もみだれ……」も、氣がはいつてゐて大に可かつた。タレとしての、演し物も嵌つて、充分にこたへさせたのは、紋敎さんの絃も、興かつて力があつた。

文樂巨頭　〔十月十日〕

玉藻前曦袂　＝道春館の段＝

豐竹古靱太夫
絃　鶴澤清六

文樂座十月興行の中繼放送である。ズツと忠臣藏があつて、中幕どころに此の玉三、切りが蝶の道行といふタテ方であつたが、八時五十分から五十分間、嬉しや古靱さんのハリキツた舞臺が聽かれるのであつた。我等先づ無條件で謹聽したが、蔭にはなつてゐるが、皇子々々、といふ文字が出る、例の『皇子兼々御懇望ありし獅子王の劍』とか『はからず皇子の見出しにあづかり』とかいふのを、全部、イヤ所によつて『若樣』としたり『我君』としたり、又は『主君』といつたりしてゐた。萩の方の『我がつま此の世にましまさば』は『せめて夫のましまさば』といつてゐた。此の方が本文なのであらう。金藤治の『いツかなひるまぬその顏色』は圖ぬけて大きく、後の『上見ぬ鷲塚』のセヽラ笑ひが、ちよいと變つて居たが、スバラシイ笑ひであつた。桂姫の例のサハリは、アノ惡聲で、無論、喝采は出來ず、双六の條りも、フアンで無ければ、人形の動きも見えぬから、ダレて來て損であつたが、奥へ進んで、萩の方とのヤリトリなどイキも吐かせず、時間の都合で、段切りまで聽かせられなかつたのは、惜しい〳〵である。清六君も、中々腕を上げられて、兩娘の呼出しのあたり、結構だつた。

齋藤氏に應ふ

近江清華

前號の貴稿『津太夫今後の語り物に就て』を拜讀致しました。

日に〳〵衰退に傾きつゝある淨瑠璃を憂ふる今日、貴下の如き熱烈なる愛好家のあることは誠に心強き次第で、先以て敬意を表します。

貴下の力說さるゝ處は、私も双手を擧げて贊成であります。が、これが昔日の文樂座であつたなら、勿論言ふべくして又行はれたでありませう。しかし何分今は松竹といふ營利會社に依つて興行されてゐる以上、我が國が世界に誇るべき最大の藝術として、永き傳統と洗練された藝術を持つ文樂座ではありますが、それは倒底不可能のことで、津太夫師を家へ招き、あれが聽きたい、これを聽かせて欲しいといふのは津太夫師と私との個人關係であつて、一旦松竹の興行となつたら、紋下津太夫たりとも自由にはならないのであります。

津太夫師ばかりでなく、土佐太夫師も、古靱太夫師も語りたいものが多々ある事でありませう。

しかし、一近江清華が文樂座東上の都度、興行間の切符を買切つて松竹に利益を與へたなら、それは希望を滿たす事も得ませうが、微力の私にはそれは出來ない事であります。

又東京の素義（東京と限らず）で、興行中滿員を締め得る程の援助をしたなら、松竹も或は我々の言ひ分を通しませう。が、素義といふものゝ心理は聽くといふより語ることが一念の道樂であつて、其の證據には文樂が來たからと言つて、一體素義の人達が幾人行つてゐますか、數へるに數へやうのない程に少ないのであります。これでは松竹が素義を相手にせぬのも無理はありません。

萬一松竹が素義を相手に興行をしたなら、忽ち文樂座滅亡の時期を早めるわけで、松竹が營利會社でこそ、そこが我々には一つの仕合はせとも言ふべきか、會社が大衆に向つて普及宣傳してくれますので、衰退だとか、忘れられるとか言ひ乍らも、まだ〳〵文樂人形淨瑠璃の命數があるのではありますまいか。

何分松竹は前述の通り營利會社で、文樂の保護者ではありませんから、何んとも致し方はありません。けれども松竹とてさうばかりではなく、昨年九段目問題を惹起した時の如き、責任者が私を訪ねるなどの厚意もあり、今年は九段目を上演して、我々の言ひ分の一部を通してゐます。

いづれは御希望を滿たす機會もある事と思ひます。――十一月十五日――

『のろま』の語に對する空想（承前）

中山德太郎

古代學の研究家中山德太郎氏から玉稿を頂きました。佐渡の「のろま人形」の始原から稿を起され、のろまの語に就ては大言海の說明より引き、更に氏一流の空想と解說を加へ、しかして古代人形なるものゝ起原を說かれたもので、文樂人形を愛する我淨曲界にも、必ず好侶伴たる事を信じます。

――記　者――

◇

「のろま」と人形との關係を檢討するに先ちて、一應左の事を知つて置く事が必要であるかの樣であります。否是等の諸項は折口先生が、古代研究に於て御發表になられた其の學說を紹介すれば事足るのみならず、人形の有する「のろま」の或物も自然に諒解出來る事と思ひます。私が今此處で古代研究から援萃して見たいと思ふ事は「虫送り」であります。其から折口先生は人形の初めを古代研究七〇一頁に「雛人形と女神」と題した項で

（前略）此迄の學者の說明では、其の時の穢れを移して水に流す筈の紙人形を流さずに、子供、女の玩び物になつたのが雛祭りの雛だと云ふ樣である。

穢を移す人形とは、卽ち、撫て物（ナデモノ）、形代（カタシロ）、天兒（アマカツ）、などの名によつて呼ばれて居るものである（中略）

從來の我國の好事家肌の學者の研究では、人形の歷史と云ふものが比較的時代の新しい處に限られて居る樣である。殆んど此撫物位が人形の起原をなす位に考へられて居るが、其んな短い歷史では片付けられないのである。元は矢張り信仰上の對象として生れたものには違ひはないが、祭の中心行事に人形の與る事は平安朝から近世迄は證據はある。斯んな人形は「サイノヲ」又は「セイノヲ」と呼ばれて居つた。是を直に御神体と見立てると云ふ程の古代の形は見當らぬ。萬葉集あたりに採錄された民謠の中には古事記、日本紀に洩れた昔物語りであつて

極めて素朴な身振り芝居或は偶人劇の舞謠であつたものが相應に思せつけられたのである（中略）。

そうして神事に使はれる偶人が次第に遊戯化して來る道程にはキツト此神事劇が梯渡をして居る事に違ない。勿論平安朝頃の上流の女達に玩ひ物には、撫て物、形代、天兒などといふ名で人形はあつたであらうが、秡除の穢れを移す人形を其のまゝ玩具にしたと云はれない。形が同じである處から同樣の名前を附けたと見る事も出來る。殊に天兒などは秡除以外の神事の人形である事を見せて居ると云ふらしい。（中略）

先生の議論に從ひますと、人形の歴史には秡除の穢れを移す撫物形の人形は第二期的のもので、其以前に今一ツの時代があつたと云ふ事になります。此第一期は何であるかと申しますと、先生は何々なりと確定的には述べられては居りませぬが、先生の偶人信仰の筆を次第に見て參りますと私には、

「常世の國から來る「マレ」人」

の形其のものが人形であると云ふのではないでせうか、私が斯んな事を申すのも先生が古代信仰に發表された

偶人信仰の民俗化、「ク、ツ」と人形の關係、淡路西の宮と人形の關係、草人形の信仰、神渡りと秡除との結合

「ク、ツ」以前の偶人劇。

諸項を熟讀するとどうしても人形は「まれひと」の形代であると云はねばならぬ樣であります。是等の諸論文は拔萃して此稿に擧げる考へでありましたが、餘り紙數を要しますので見合せました。諸彦は是非一度讀破する事を御奬め致します。

◇

前項の樣に私は折口先生の說からして人形の第一期の歴史は「常世より渡り來るまれひとの形代」と想像致します。之が次に萬葉時期に入りますと、形代は偶人として變化して「ほがひ」の手によつて祝言を謠ひながら劇化し、第三期に「ク、ツ」に移背され、淡路や西の宮系に迄引下げられたのだと思ひます。物の境目は判然と區劃さるゝ色鮮やかな線はありませぬ。何時でもぼかされます、其故に「ほがひ」の中にも「タ、ツ」が混つて居つた事とも考へてよろしいかと思ひます。

人形は劇化すると同時に秡除系の形代化の經道をも步みました。之には人形は先にも申しました通り「まれ人」の形代であるから一面に於ては精靈の代表であると見る事も出來ます。さうなりますと穢惡の負擔者とも見做します。草人形の信仰が芽を吹き出して來ます。折口先生は古代研究一〇六頁に於て

〇（草人形の信仰）我國の傳說では稻虫發生に於て尠く共横死した人の化成を原因と說いて居る樣である。其の中に特に多く云はれて居るのは齋藤實盛に假托して說れて居るものであるが、此大なる原因と考へらるゝものは琵

琵僧が凶悪除けに語つた物語から出て居るのであらうと云ふ事だ。語られた主人公の強さになぞらへて追拂ふと云ふ思想が本來であつたからだと思ふ云々。

○其の他に「さなふり」時に作る田の精靈或は巫女を形つた苗を組んで作る――「さなぶり」人形の形式が虫造りの時にもまなばれた爲めだと云ふ事も考へて見る必要がある樣だ。田の神として祀つて置くのだから、虫の出た時に之に背負せて出すのである。併して此考は尠く共造り人形の正統ではなく、寧ろ怨念を懷いて殺された者が稻虫になると云ふ考方の元を尋ねて見なければならない。其處に出て來るのが虫送りの草人形である。尠く共日本國の信仰では最初の藁靈（クサヒトカタ）を「スサノオ」の命と考へて居る云々。

○我國では殆んど最初の傳說から藁人形と凶惡との關係は云はれて居る。藁人形と死靈との關係は近代になつて突如として考へられたものではない云々。

人形は藁靈と同一の運命の許に取扱はれたとすると人形は又巫女の生命的職業として働いて居る神と人間との中間にあつて神の語なり、又神を慰め嬉ばす其の人と同一に見做されないでもありませぬ。否巫女以上で人形は初めは「まれひと」で次に精靈の形代なれば、神と人との中間に位する者であらねばなりませぬ。其處に草人形の信仰も生れて出て來た事が知れます。

「のろま」には前記の樣に詛魔であり一面琉球「のろ」の姿も見せられる以上之に類似した人形にも「のろま」の精神が含まれねばなりませぬ。此處が私の云はんとする「のろま」と人形との關係であります。佐渡に「のろま」人形の名詞がありますとすれば、最も人形に取つてふさわしい名前であると思ふのであります。何人が名付け親であるか親しみのある人だとしみ〴〵させられます。

◇

此度は他の方面より「のろま」と人形との關係を少しく記いて此稿を終り度いと思ひます。其は他ではありませぬ「のろま」なる語を人形に冠したと云ふ事は前項の樣な詛魔を人形が有つて居る爲めのみではありませぬ。詛魔と人形とは單に私が空想からして生れ出た假定說のみで、全面的ではありませぬ。私をして僞はらぬ內心を申上げますと、若林醫學博士の記事にある

此頃、京、大阪の操り芝居に野呂松を元祖とする野呂間鹿呂間と銘打つて淨瑠璃段物の間狂言をなしたと云ふのであるから、持歸つた人形は公卿人形もあれば間に出た野呂間もあつた事と思ふ云々。

の間狂言の野呂間から出た人形であつた故に「のろま人形」にあつた事には相違ないとは思ひますが、此間狂言に出る人形のみが「のろま」ではなく、私に言はしむれば人形全形が「のろま」であつたのではあるまいか、其の理由として

間狂言に遣ふ人形の容姿が顏貌が「のろま」即ち間抜面して居つたのみでありませぬ。其の頃の人形の舞振りが「のろま」であつたかと思ひます。今日見る人形の舞振の如き現代的の姿態ではなく、能樂式を見る如き舞振りであつたのではあるまいか、若しさうすると此「のろま」なる言葉舞振の間抜け「のろま」式が其の當時の人をしても尙且つ神秘異樣に見られ、又感ぜられた點から發足して「のろま」人形と世間一般に云ひ習はす榛になつた事と思ひます。私は人形の舞振りを能樂式と申しましたから、其當時は劇的ではなく「ほかひ」人達によつて遣はれたのでありますから、あの悠々然たる態度を示して舞はれたのかとも想像されます。人形も能樂も共に神の姿を見せるものである以上、此舞振りが當然過ぎる程當然であります。

其から今一ツ「のろま」に「のろ松」なる異名があるのは「のろ松」勘兵衞なる人形遣から出たと何人も申しますが、之にも私は少しく疑義を挾むものであります。「のろ松」勘兵衞の「のろ松」は當今の姓の如きものではなく、此「松」と云ふ一字は、人形遣の藝名の一字ではないかとも思ひます。是に關して多數の例證を持つては居りませぬが

（前略）而して此人形出遣ひ最初は突込人形遣ひ辰松八郎兵衞云々（中略）初代竹本嶋太夫等の淨瑠璃で上演して自ら「手妻人形太夫」と稱し座本と櫓下太夫を兼ね後葺屋町に辰松八郎兵衞座を建たが、享保十九年五月九日江戸に沒した云々。

と鹽崎曠氏が操人形の發達の經過に就てと題する一文が風俗研究二百六號十二頁に出て居ります。一例を以て萬般を推すのは無謀ではありますが、一例でも例證は例證であります。其頃に私は

昔の操人形遣の太夫名には「松」の一字と「兵衞」の二字を襲用する事が人形太夫の貫目を見せたる風習があつたのではないかと疑ふものであります。「のろま」人形遣の「のろ松」勘兵衞も其當時人形遣の一人として此「松」と「兵衞」とを襲用した一人で、而して名人であつた爲め「のろま」人形遣の「のろ松」勘兵衞であつたより「のろま」人形の固有名が出來た事と之も空想の一ツであります。だらしのない長文に入りさうですから此度は之で筆を擱します。而して左の俚諺を以て自分を自分で笑ふ事に致します。

「のろま」何云ふ團子は米の粉　　呵々

百號に達した喜び

田中煙亭

創刊號の昔から、ともかくもお手傳ひをさせて貰つた私、今、何か書きたい氣は一ぱいですが、種々のさゝはりで締切に間に合ひません。申譯もなく殘念でもあります。

番附も百と數へて顏見せや

『かさね』のこと

樂々翁

薫樹累物語の主人公たる累のことに就ては、まち〳〵の説があつて一定しない。近頃「近世奇跡考」を見た處、左の如く記してある。

『羽生村累古跡』下總國岡田郡羽生村百姓與右衛門妻かさね、正保四年亥八月十一日夫與右衛門が爲めに絹川に於て殺害せらる、其處を今に「かさねが淵」と云ふ。與右衛門後妻をむかふること五人、みなかさねの爲に取り殺さる。六人目の妻、娘きくを産む。きく十三の年（寛文十一年亥八月中旬）その母も又取り殺さる。翌十二年子正月四日より、かさねの怨靈又きくにつきて苦しめるを、同年三月十日尊き教化にあひてかさね成佛し、きくの一命たすかる。

右は『死靈解脫物語（元祿三年板本）』『新著聞集（寛延二年板本）』等にもしるしてあるから、こゝに委しく記す要はないがかさねは實名るいと云つて、累をかさねと訓に讀んだ事は法藏寺の過去帳に俗名るいとあるを以ても證される。

次に芭蕉が『奥の細道』に

那須野にてちいさきものふたり馬の路をしたひてはしる、ひとりは小娘にて名をかさねと云ふ、聞きなれぬ名のやさしければ、としるして曾良の句に

かさねとは八重なでしこの名なるべし

とあり。

これも累といふ名を訓によんだもので、かさねと云ふ聞なれぬ名のやさしと思つたのは、元祿の頃は羽生村のかさねの事がさまで世に聞こへなかつたのであらう。

與右衛門は後に剃髪して西入と言つた。延寶四年六月廿三日死す。其子孫今もなほ羽生村にあつて、代々堀越與右衛門と名つてゐる。西入與右衛門より六七代相續すると聞くが、きくは長壽にて享保十五年戌五月三日七十二歳にてみまかる。（今を去る二百十年前）同村羽生山法藏寺は與右衛門代々の菩提寺で、累、助、きく三人の墓あり、累、助、成佛得脫の繪曼陀羅もあり、又「明顯瑞祥錄」と云ふ古書が二卷あつて、かさね等の事跡が錄されてゐる。

法藏寺過去帳寫＝理屋松貞信女（俗名るい、行年三十五、正保四丁亥年八月十一日）單到眞入童子（俗名助、三歳、寛文十二壬子四月十九日、此年號は助得脫の年にて、實は慶長十七壬子四月十九日死）榮譽不生妙槃信女（俗名きく、行年七十二、享保十五庚戌五月三日）

讀者の領分

匿名投書は掲載致しません

義太夫語り方研究に就て

森　三好

貴誌第九四號に薊露氏の朝顔日記大井川の段ひれふる山の悲しみと云ふ意味、其他數題、太夫として是非覺得の必要ある有益の御解説を賜はり、斯道の研究に盡粹する吾等衷心感謝拜讀せり。希くば益々此種の御揭示あらん事を懇願して已まざるなり。

元來此義太夫の如何に賢明なる作文なる事は既に識者及愛義家諸氏の常に賞讃の的となり、今文面に於て彼是論ずるものに非ざれ共、諸々の太夫の語られし處を數種揭げて所感を述べて見れば、義太夫を成るべく一般的容易に理解し得る樣語るが肝心なりと謂ふも過言でないと信じます。此朝顔日記は淨瑠璃として尊ばれ、田都素玄洽く流行しつゝある藝題なり。今此藝題に就き今日迄聽きし研究點を擧げて察れば、駒澤の詞に甲子の年に出生せし男子の生血を取つて服すればの處を、男子のいきちを取つて服すればと語られし太夫さんあり、之は文字はせいけつに相違はなけれども、語る上にはいきちを取つて服すればと語る方が宜しいと存じます。序に此種の研究を擧げて見れば、本藏下屋敷の饗應をもてなし、五百石を五百こく、公の一字をきみの一字につゝがなく委しく留めし繪圖の面を繪圖のめんと語る方が宜しいと存じます。

『のろまの語に對する空想』と『佐渡の句』を讀みて

邦　治生

のろまの語に對する空想の稿は、門外漢たる小生等には左程訴へる所はありませんでしたが、字句、即ち我々の日常使用せる言語には、それ相應の起源價値が存在する事はうなずけました。單に「のろま」といふ一語に限らず、其の他の我々の使用せる言語のうちで、所謂解釋の出來ない樣な言葉でも何等かの意味に於いて、古代の風俗傳統の由來してゐる事が了解出來ました。言語は思想の化石であるといふ事が明らかに理解出來ました。筆者の題する空想とはそれは明に筆者の堅い信念「のろま」についてはこう考へる可であると言ふ筆者の强張であらうと思ひますが、その言語に對する博識はちよつと驚異です。

句に對する愚感——

歲月と共に人は行く。こう言つた感が父の句について考へられます。若輩は若輩として、未洗練の虛僞のない批評を述べさせて貰ひます。佐渡にありし日の句に於いてその作られた句全てから受ける感じ、それは何んとなく淋しい、一讀一默の餘韻を胸に吸着させられるのを禁じ得ません。我々から見れば潑剌とした、時代の雲に波亂を卷きおこさうとする氣概がうつすらとして、遠い燈臺の燈の如くにかすんで、讀むうちになにか物悲しい、弱々しい悲哀のこもつた思想が胸裡に跡ずけられます。これは或はやはり病後のせいでせうか。精神的に安着の地を求めて、人生の一更の深みをきわめたに由因するのでせうか。殊に『夜長の店で古い人形の寂しみを感じ』の一句はその深みをしみじみと味はえる句でせう。我々若輩には一寸かみしめられない古典的な雰圍氣です、靜かな、秋の夜、ぶらりと町へ出て、ちよつと店に立止つて、ゆかりの深い人形を眺めて、その人形のけみした時代の流れをば、たゝずんで反省する、そしてそこにあらわれる人生の悲哀をば充分に懷古すると共に、靜かな秋の雰圍氣はおそらく人形と共に、人形を眺めるその人自身にも激しく喰入つて來たのでせう。このさびのある句は小生の最も注目した句で、風流を超越した句の極地ではありますまいか。

『太棹』總目次（一）

自第壹號　至第百號

▼第一號――▼發刊の辭（富取芳河士）▼義太夫の將來（中野三允）▼難波戰記（中野三允）▼名士義太夫觀（近松秋江・巖谷小波・佐藤紅綠・馬場孤蝶・岡鬼太郎・白石實三・福田六福・伊原青々園・畑耕一・山崎紫紅・猿山儀三郎・上司小劍・長谷川伸・金森匏瓜・小酒井不木・土田杏村・高木斐川）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼義太夫漫談（三宅孤軒）▼淨瑠璃藝術の命脈（谷響居士）▼半兵衛の咳（癖三醉）▼松のみどり（豐澤松太郎）▼實說心中調（孤村生）▼佐太村と念佛（中野三允）▼紅綠會短評（芳河士）▼先づ意志に出でよ（田畑大有）▼捨小舟（金川文樂）▼藝界寸話▼太棹俳壇（芳河士選）▼口繪淨瑠璃外題附歲代記（豐澤芳太郎氏所藏）

▼第二號――▼文樂を迎ふ（富取芳河士）▼立ちぎき（平山蘆江）▼義太神樂（中野三允）▼義太夫を喰べる（川村花菱）▼名士義太夫觀（德田秋聲・岡本綺堂・高島米峰・菊池幽芳・高安月郊・木谷蓬吟・木村錦花・森曉紅・前田曙山）▼文樂人形淨瑠璃（中野三允）▼誘蛾燈（芳河士）▼松のみどり（豐澤松太郎）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼義太夫文句默酒落帳（三浦樂太郎）▼關西だより（吉田冬葉）▼稽古漫談三日坊主（三宅孤軒）▼雲のゆき（木下笑風）淨瑠璃くちづさみ（響阿彌）▼金川節其他（中野三允）▼藝界寸話▼太棹俳壇（芳河士選）▼おもなる會▼各地會報▼口繪（豐澤松太郎師）

▼第三號――▼秋くさ（孤村）▼才能者の發見（三宅周太郎）▼義太神樂（中野三允）▼名士義太夫觀（笹川臨風・田中煙亭）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼淨瑠璃くちづさみ（響阿彌）▼私の家と義太夫と（三浦樂太郎）▼通話會劇（中野三允）▼藝界寸話▼太棹俳壇（芳河士選）▼各地會報▼素昇と美朝（巢鴨町人）▼正音苦聲▼口繪（岡本癖三醉畫・泉岳寺墓參の文樂座）

▼第四號――▼ラヂオと義太夫（富取芳河士）▼義太神樂（中野三允）▼松のみどり（豐澤松太郎）▼竹本播磨追善（阪井久良岐）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼時代物の時代は過ぎ去った（石井琴水）▼淨瑠璃くちづさみ（響阿彌）▼私の家と義太夫と（三浦樂太郎）▼評（驢胖・小むら）▼太棹俳壇（芳河士選）▼おもなる會▼正音苦聲

▼第五・六合本――▼義太夫界を振興行せしむるには（平山蘆江）▼太棹漫談（島東吉）▼賀の祝と堀川（坂本猿冠者）▼志度寺のこと（圓城寺清臣）▼芝居ばなし三人吉三（田村西男）▼會を聽く▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼義太神樂（中野三允）▼女殺油地獄（一）（近松門左衛門作原本）▼俳諧手習鑑（杉山田庭）▼

聲義會を審査して（竹本さの太夫）▼人形座所感（喬哉生）▼のんき（芳河士）▼雜報欄▼松のみどり（豐澤松太郎）▼口繪（東都五十義會の人々・人形座四月興行の樂屋）

▼第七號――▼義太夫界を振興せしむるには（副島八十六・高野辰之・伊原青々園・加治時次郎）▼文樂の二日目（中野三允）▼義太夫人形座（三宅周太郎・平山蘆江）▼大町桂月と娘義太夫（中野三允）▼會を聽く▼河内山の恐喝取財（田村西男）▼淨瑠そゝろ言（黑顏老人）▼女殺油地獄（二）▼滑稽趣味淨瑠璃の事（豐澤松太郎）▼口繪（人形座六月興行・赤坂紅綠會）

▼第八號――▼はつ秋（孤村生）▼人形淨瑠璃の頭（榎本千花俊）▼夏目漱石の義太夫知識（中野三允）▼竹本劇漫談（三宅孤軒）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼直助權兵衛（田村西男）▼人形座偶感（豐竹巖太夫）▼大阪より（小村生）▼靜岡通信（喬哉生）▼太棹俳壇（芳河士選）▼會と評・雜報

▼第九號――▼政府當局並に江湖義太夫愛好者に送る公開狀（中野三允）▼中村吉右衛門と竹本劇（坂本猿冠者）▼身振劇の梗概（豐澤松太郎）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）▼淨瑠璃くちづさみ（響阿彌）▼九月の歌舞伎座（三宅三郎）▼因會幹部に呈上（義狂道人）▼德島通信（松帆生）▼太棹俳壇（芳河士選）▼會と評・雜報

▼第十號――▼太功記問題（中野三允）▼攝津大掾を憶ふ（岡田翠雨）▼竹本劇と素人芝居（坂本猿冠者）▼合邦のこと（圓城寺淸臣）▼太功記改訂に就て（德田秋聲・高島米峰・副島八十六・平山蘆江・佐藤惣之助・小杉天外・えむ・てい・山崎紫紅・中山稻靑・長谷川伸・三宅孤軒・大塚警察署長・岡田翠雨・加治時次郎・中澤巴・南方松若）▼贔負すると言始めし事（豐澤松太郎）▼淨曲そゝろ言（黑顏老人）義太夫人形座の舞臺裝置と演出に就て（小泉眞吉）▼靜岡通信（喬哉生）▼東都素義會（驢胖生）▼太棹俳壇（芳河士選）▼會と評・其他

祝百號
義太夫三絃師
菊屋
十河鑄吉
神田區小川町三ノ九
電話神田三九五番（呼）

祝百號
貸席
並木倶樂部
淺草・雷門
電話淺草一二三五番

堀川の「何と言葉も傳兵衛」

岡田蝶花形

第二回淨曲研究會の公演に川口初音氏は堀川を語られたが、其夜の批評會で私が同氏の語られたのを傾聽したが「何と言葉も傳兵衛」の傳兵衛を「でんべゑ」と四字に語られ、あとの一字即「ゑ」の字を少し延して持つて居られたが、私は飽迄傳兵衛を「でんべうゑ」とこゝだけは五字に語る方がしつくり當てはまると思ふと提案した。然しこれを「でんべゑ」と云つても誤りといふのではないのである。

私の提案の理由は

(1)字數が「でんべうゑ」で五字故ピツタリあてはまる事

(2)言葉も出ないの出んに掛け文句になつてるのに下が一杯になると、出んといふ掛け言葉が一層よくしつくり當てはまる事

(3)その下の文句が別の動作になつてるからきつぱり上の文句がつまつた方が下の文句が出易い事

(4)嘗つて傳兵衛が武士であつたから「べうゑ」といつても敢て差支へない。

然るに同批評會席上石井規外君は故人綾瀬などに聞いて「でんべゑが」とがを入れるといふが、それでは下の文句との續きが悪く、傳兵衛が忍ぶとかいふ文句ならいゝが、泣く音をぬぐひ故一寸語呂が悪く、むしろぶちこはす事となると思ふ。大方の御意見を聞きたい。

會報

投稿歡迎

若手會

月番

第五回若手會を十月廿七日文化倶樂部に開催した。今回より井上巽氏が新加入、前例に依つて序席に登場しようとした時、漢口陷落のサイレンが鳴り響いた。そこで若手會會員が舞臺に登場して、都昇氏の發聲に依つて客席一同と共に萬歳三唱、幸先きよき若手會の前途を思はせるものがあつた。當夜の番組は

太十（巽、紘平）輝虎配膳（子太郎、和孝）山名家（光玉、龜造）鮨屋（高尾、粂造）堀川（呂聲、龜造）安達（都昇、都太夫）

尙柳光氏は健康を害して今回に限り欠演であつた。終つて一同漢口陷落祝賀の宴に移り應援に平山平茶氏などの顔も見えて、例に依つて盛會を極めた。

三華會の作今

森三好

先さに一部報知申し上げたる三華會は、既報の如く初回を本所菊川倶樂部に於て無事盛會裡に終了したるが、第二回は秋晃爽凉軍國の秋を飾る十月十七日神嘗祭の佳節を期して、菊花薫るたそがれに東都の繁華地新宿角筈多加良倶樂部に於て開催した、時恰も未曾有の日支事變に出征赫々たる武勳をたて、適れ聖戰の華と散りたる護國の英靈祭神合祀の靖國神社秋季臨時大祭に付、上京せられたる遺族を招き慰安に努めたり。

百號を迎へて

富取芳河士

昭和三年六月一日、產聲を擧げて玆に『太棹』は十一年の星霜と、百號の齡ひを重ねました。

これまでに育つて來ました事は、申す迄もなく皆樣の御後援と御同情の外なく、厚く御禮申上ます。

趣味と研究を目標として生まれ、一つは以て淨曲振興策を計りたく、それには義太夫なるものを大衆に向つて普及する事が急務であると、先づ目をつけたのがデパートのホールで、本誌發行前に當つて、昭和三年三月十九日正午から、三越ホールで第一回の淨曲會を華々しく開催したのであります。これが東京のデパートでは義太夫會の魁けで、それから、三越では十五回を終りとして次は上野松坂屋に移り、こゝでも十數回に亘り、又は白木屋、或は淺草松屋ホールに於ける竹澤一座身振劇入義太夫會など、實に百數十回の催ほしに及びましたが、弊社の趣旨に御賛同下され、此間、御繁忙中にも拘はらず援助御出演を賜りました皆々樣にも難有御禮申上ます。

俗に三號雜誌と申しますが、雜誌經營の難事たることは御承知の通りでありまして、太棹も御多分に洩れず辛ふじて發行を續けました二年目頃、遂に休刊のハメに陷入りましたが、此時小川文雄氏が入社されて氏の鞭韃と共に某篤志家の救ひで暫くの間毎月印刷費の援助をうけ、復活致しましたことは終生忘れ得ぬ事であります。

『太棹』は溫なし過ぎるとか、もう少しビリ〳〵と書けとか、いろ〳〵と御注意を下さる向きもありましたが、成程と合點しながらもどうしてもその氣になれずにしまひました。

今後ともこうした氣持で『太棹』は續けられることゝ思はれます。何卒倍舊の御後援と御愛顧の程を偏に御願ひ申上ます。

兼崎地橙孫氏より

啓　初冬御隆昌大賀候『太棹』益々發展祝申候玉句拜讀面白く候『骨』時代を顧みて感無量

石蕗のさき了る窓邊に「太棹」おきてのんびり暮れた

祝百號

豐澤松花

太棹社彙報

▽本欄は通信又は番組御送付のもの、或は新生の會を報道するものであります。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。
——記者——

兜會 戰捷祝賀 義太夫大會

漢口陷落を祝し、兜會の臨時大會が十一月三日午後一時から、雷門並木倶樂部に開催された。入口には紫の會旗と戰捷祝賀義太夫大會の大旗が靡き、會場は祝漢口陷落と祝廣東陷落の二旗の外、兜會の小提灯並に小旗を以て色取られ、聽衆には多額の福引景品の外に近江清華氏は特にお祝ひの菓子を配られるなど祝賀の空氣が滿場に溢れ、盛會裡に午後九時閉會をした。

祝詞並に挨拶（會長、副會長、幹事）白浪五人男（駄右衞門、三蔞。辨天小僧團壽。南郷、可笑。番頭、和可葉）太十（もみぢ、和光）松王屋敷（春樂、猿幸）安達（三葵、團市）沼津（三幸、東）——合邦（團壽、米翁）布四（美浪、團八）鈴ケ森（松寶、團八）壺坂（美峰、猿之助）——朝顏（可保留、龜造）五斗（松蝶、米翁）湊町（清華、寛三郎）又助（巴猿藏）——大切（忠七）由良之助（松寶）九太夫（清華）おかる（美峰）平右衞門（三幸）絃（猿之助）

清樂會

十月廿九日夜、第五回を本郷春木町の志久本で開催。

八陣（靜子）小唄（松浦）吉田屋（春子）小唄（藤田秀峰、田村梅秀）先代（智惠子）小唄（龜好）安達（いく子）清元（松浦）乃木將軍（清華）絃（寛三郎）

淨曲無名會

十一月十七日午後四時より、丸の內電氣倶樂部に開催。河野國聲氏は自演忠六の語り時間を切詰めて、二十分餘で走り〳〵に忠臣藏の解說をして、聽衆に義太夫を聽く前の豫備知識を與へられたが、これからの若い人々を義太夫黨に引き込まう淨曲普及の策としては、是非一段毎に此の解說が必要である。

太十（紅司、辰六）山名屋（美峰、猿之助）合邦（どくろ、司好）忠六（國聲、猿三郎）新口村（操、道之助）鮨屋（長平、龜造）

淨曲研究會

中澤巴、近江清華の兩氏によつて組織された淨曲研究會は、隔月程度に日本橋三越ホールに於て開催される事になり既に二回開催し、出演者は兩氏の外其都度勸誘するもので、第三回は千鶴、平茶の二氏が加はり、十二月十二日午前十一時より開催に決定した。

辨慶（司重、團吉）未定（平茶、猿之助）寺子屋（清華、寛三郎）岸姫（千鶴猿平）合邦（巴、猿藏）

中老會の座談會

毎會好評を博しつゝある中老會は、納會月の十一月は休會をして趣向を變へて三十日夕より、淺草仲見世の『水月』で晩餐を兼ねて座談會を催ほしたが、歡談中各自が斯道に關する高説を交換、胸襟を開いて和氣靄々裡に中老會萬歳を三唱して散會した。

竹澤龍造一座

目下九州地方巡業中の竹澤龍造一座は各地好評裡に十一月十六日より三日間山口縣室積町の新市座を振出しに、十九日より德山市歌舞伎座、富田町大正座、防府市惠美須座、山口市大和座、小野田町須惠座とまはり、十二月三日よりは萩市の永樂座を三日間打上げ、六日より福岡縣に入つて門司の稻荷座を振出しに、八幡市の演藝館、中間町辨天座、香月町朝日座、金田町敷島座、伊田町帝國座と十二月一杯決定隆盛を極めてゐる。

和孝會

豐竹和孝師には松林福笑、高橋宮古氏等が古い連中として稽古に精進してゐられ、外に谷口氏や最近は若手會の川口子太郎氏も熱心に通はれ、飛石かなめ氏も時々遊びに行かれ頗る賑ひを呈してゐるが、近く和孝會が組織される由で、なほ十二月十一日より三日間天現寺演藝場で左の通り開催。

壺坂、合邦、堀川（福笑）城木屋、白石、帶屋（かなめ）梅由、忠九、岡崎（宮古）彌作、逆艪（いろは）長局（王華）瀧（勢尾）沼津（柳光）新口（光玉）輝虎（子太郎）

玄素聯合淨曲研究會

十一月廿五日午後六時より、麴町公會堂に於て第三回を開催、岡田氏の解説及

國民精神作興と淨瑠璃、西村氏の新口村に對する二三の考察の話があつて、左記番組の下に演奏され、終演後例に依り批評會を催ほした。

人形淨瑠璃報國の南北座

人形淨瑠璃の衰退を悲しみ、且つは江戸時代あれ程盛んなりし人形淨瑠璃座が、今は一座もない事を歎いて立ち上つた南北座は、主宰者池田三國氏の熱烈なる意氣と溫雅なる人格とに依つて、創立以來旭日の隆盛を以て今日に至り、益々發展の道を歩いてゐるが、十一月五日（晝）明治神宮外苑日本青年館に於ける大分縣人會主催、傷痍軍人及家族慰安會に、同縣中津市出身の池田氏は進んで此の南北座を上演、太功記十段目、太夫竹本都太夫、三味線豊澤猿藏特別出演をして好評を博した。

太十（竹史、東太夫）新口村（貴昇、猿藏）長局（廣助、和歌吉）なほ次回は十二月中、出演者は矢島鐵男、緒方千晴竹本染登の諸氏。

日本帝都義太夫因會

女子部秋季大會

東都に於ける日本帝都義太夫因會に女子部が設けられて以來、理事長竹本素女師の努力と相俟つて、會員諸嬢統一の下にその奮勵振りは目覺ましいもので、先年明治座に進出して大會の第一回を開催し、全國的斯界の人々をして驚膽せしめたが、今回も又々十一月廿八日正午より明治座で秋季大會を公演して、帝都に於ける義太夫因會女子部の意氣を示し、非常な好評と滿員の盛況を極めて堂々その功績を擧げた。番組は左の通り。

（第一部）鬼一法眼（辨慶、重子。牛若丸、相玉。ツレ、佳照、駒若、春枝、素女）絃（清一、ツレ、猿玉、三生、仙玉、猿女、紋敎）玉三（素次、駒登久）壺坂（昇登、猿昇）十種香（駒龍、津賀昇）鰻谷（春枝、三生）陣屋（團蝶、松榮）——休憩——忠六（素八、駒清）朝顏（素廣、猿昇）新口村（越駒、紋敎）岸姫（團雀、清二）阿漕（彌周、三生）

（第二部）吉田屋（重子、勝之助）寺子屋（若好、清二）安達（越道、仙玉）酒屋（素昇、猿玉）先代（染登、紋敎）——休憩——鮓屋（小和光、清三）太十（佳照、清一）油屋（駒若、一三龍）合邦（素女）——愛國行進曲（總員出場）

女子 淨瑠璃研究會

十一月十七、十八の兩日午前十一時廿分より開演。

（第一日）圓覺寺（佳世子、駒照）身賣（猿司、松四郎）新口（越道、仙玉）玉三（佳照、清一）揚屋（染登、紋教）寺子屋（綾千代、猿玉）大切。本下（掛合）若狹之助（駒若）三千歳姫（若好）伴左衛門（素昇）下部（佳世子）本藏（彌周）紘（清二）

（第二日）桂川（佳世子、駒照）酒屋（若好、清二）沼津（駒若、二三龍）阿漕（彌周、清三）十種香（素昇、猿玉）合邦（越駒、紋教）大切。堀川（掛合）與次郎（猿司）お俊（越道）傳兵衛（染登）お鶴（駒若）母（佳照）紘（松四郎、ツレ、駒照）

支那事變戰死者遺家族 第三回 感謝と慰安の夕

やまと新聞社主催、東京市後援にて、十二月廿三日午後五時より日比谷公會堂で「大阪文樂淨瑠璃芝居」を開催。會員券金貳圓。

組打（隅若太夫、清友）酒屋（織太夫團六、清友）本下（文字太夫、清友）壺坂（大隅太夫、廣助、清友）なほ人形は玉德、紋太郎等の由。

大阪 大日本素人淨瑠璃大會

前號既報の通り、大阪大日本素人淨瑠璃會第六回競演大會は、竹本大隅太夫、竹本鐵太夫、竹本文字太夫、鶴澤叶、豊澤團友、豊澤仙糸、伊藤柳平、笹村ふんど、萱林松玉の各系統九氏審査の下に、十一月十九日より三日間堀江演舞場に就て、毎日午前十時より華々しく開催されたが、成績表は左の通り、なほ無審査にて下ノ關保良鈴鳳、大阪横田榮司の二氏が出演された。

成績表

横綱	吾孫子 檜	一五三、三	室川 梅光	一五三、〇	氏家 鶴峯
一八〇、三	藤田 孝調	一五〇、三	上野 鶴笑	一四五、〇	鎌田 花昇
一七七、七	椿原 喜平	一四四、四	黑臺 榮四	一四三、三	白戸小富士
一七六、五	澤田 金聲	一四二、〇	平田 幸遊	一四〇、六	松井 松鳳
一七五、七	武居 信濃	一四〇、〇	大栗 旭暉	一四〇、〇	今永 永寶
一七五、〇	奥田 利生	一三一、〇	藤井ゑてほ	一三八、九	野崎 糸遊
一七三、九	野口 生樂	一三七、四	菊井きく水	一三六、四	山田十九壽
一六七、三	橋本 瓢樂				
一六五、一	樋口 可昇				
一六二、八	矢野津の子				
一五九、一	國本 登一				
一五七、四	井崎 貴道				
一五五、四	小泉 泉				
一五五、一	鬼頭 千鳥				

二六、〇　寺阪　眞勝
二六、〇　山下　東舛
二三、四　八幡　晴山
二三、四　頓花　老若
二三、四　鎌田　駒平
二三、九　佐野　一枝
二〇、一　岡田　吳山
二〇、一　林　やなぎ
一九、九　植田　華峯
一九、一　有尾アリヲ
一七、六　清水　小昇
一七、五　玉水　吟青
一七、五　八木　一蝶
一五、六　福田　里昇
一五、二　永田　喜友
一三、七　小嶋　敷島
一三、〇　辻野　白水
一三、三　奥村　三玉
一一、五　北住　瓢
一〇、七　山内　惠若
一〇、五　佐野　二見
一〇、四　阪本　藤政
一〇、四　車戸　轟
一〇、四　鴻池　琴城
一〇、〇　藤原　千昇
一〇、八　和田十九集
一〇、五　今西　錦
一〇、四　溝口　甲
一〇、〇　古賀　大彌
一〇、〇　三久保三調
一〇、二　大江千登里
一〇、一　清瀨　都廣
一〇、四　岩橋　勢月
一〇、〇　田島　集樂
一〇、八　大坪　大鏡
一〇、二　小林　豊
一〇、八　成田　特曹
一〇、三　西谷　一鳥
一〇、二　三宅　花鳳
一〇、二　磯野　重枝
一〇、〇　西村　舟樂
九、八　中東　照十
九、二　洲崎　麒鳥
八、八　横田美よし
五、八　島上　龍昇
三、六　大前　萬兩
三、四　吉川　春清
一、七　石井　榮司
八、三　山東　山鳥
以上

賞狀＝永田喜友（大阪）武居信濃（大阪）頓花老若（大阪）

入賞者＝優一等文部大臣旗保持阪本藤政　大關＝西大關旗椿原喜幸（京都）東大關旗藤田孝調（大阪）初代横網吾孫子櫓（大阪）

（大阪）同二等文樂座榮冠旗古賀大彌（八幡）同三等北住瓢（大阪）

京都　素義因會秋季大會

京都素義因會は、十一月十五、十六の兩日午前十時より、竹本錦太夫、梶喜壽翁氏講評の下に北野會館に於て、京都素義故人追悼淨曲會を兼ね、左記番組に依り第四回大會を開催した。

（初日）伊賀五（タツミ、金吾）鎌三（出雲、喜市）――先代（喜調、槌之助）柳（浪二、新作）日蓮記（錦、槌之助）安達（來司、津尾）――聚樂町（駒井、芳造）沼津（松鶴、兵三）辨慶（菊二、新作）新口（寛蝶、團作）油屋（久喜、槌之助）先代（池松、新作）布四（義石槌之助）沓掛（梅華、新作）志度寺（龜甲、咲治）壺坂（木尾井、咲治）長局（仁志貴、槌之助）鰻谷（金聲、金吾）――岸姫（みよし、喜市）本下（猿昇、槌之助）伊賀越武助內（常朝、咲治）太十（山城、芳造）陣屋（三調、槌之助）合邦（士福、槌之助）先代（大和、門之助）儀作（山昇、兵三）岸姫（ひよこ、鱗糸）太十小花住、喜市）彌作（喜幸、喜市）――白城屋（秀蝶、新作）中將姫（眞砂、辰造）大切。陣屋（掛合）義經（眞砂）藤ノ方（華遊）梶原（十九壽）熊谷（タツミ）相模（巴笑）軍治（木尾井）彌陀六（出雲）紘（金吾）

（二日目）日吉（喜幸、喜市）重の井（金聲、金吾）――壺坂（金糸、金之助）

辨慶（榮糸、喜市）帶屋（きよし、團昇）合邦（千石、吉左）——本下（京屋、門之助）朝顏（岩戸、辰造）嫁おどし（丸玉、咲治）新口（井昇、兵三）新口（榮司、團作）彌作（貴司、兵三）油屋（紹正、團作）酒屋（治若、門之助）堀川（大和、團作）酒屋（龜壽、團作）天王寺村（糸遊、喜市）佐太村（茶木、團作）鎌三（タツミ、金吾）——辨慶（小三勝、團昇）鳴門（綱笑、新作）壺坂（紫雀、新作）油屋（三津子、初團）濱松（魚藤、兵三）鰻谷（甲、喜市）本下（小昇、槌之助）寺子屋（十九壽、新作）鮮屋（鹿大、新作）先代（華遊、辰造）志度寺（出雲、吉左）——小磯（巴笑、金之助）忠九（萬貞、彌七）大切。野崎村（掛合）久作（喜幸）お光（金聲）お染（小花住）久松（糸遊）下女（三津子）母（秀蝶）絃（喜市）

大連 旭勝會

今夏豐竹呂太夫師の渡連を機に、同師に就て猛稽古を積んだ旭勝連有志は、十月十七日午後一時より淡月樓々上に於て左の番組に依り溫習會を開いた。

太十（榮枝）寺子屋（三升）合邦（萬華）沼津（表具）彌作（璃松）新口（浪花）安達（白水）酒屋（あさひ）逆櫓（肇香）堀川（喜樂）絃（竹本旭勝、ツレ、大檢松衞門）

故西田芳雄氏

西田可松氏の次男軸重兵曹長芳雄氏は鳥海部隊に屬して南支に勇躍中、惜しくも九月戰病死され十月中旬陸軍葬が執行されたが、十一月十三日向島吾嬬町の自宅にて盛大な慰靈祭が營まれた。

義太夫祖先祭

日本帝都義太夫因會にては、例年の通り十二月十五日午前十時より、兩國回向院に於て祖先を始め先亡太夫並に三味線の法要を營み、引續き日支事變戰病死將士の慰靈祭を行ふ。

祝百號 綾秀會

故野澤金造 一年忌墓參

昨年物故せし野澤金造師一週年に付き十一月十三日、嗣子英造、未亡人うめ、愛女けい、松尾武市、井上東玉、土屋團紫、津輕團州、小澤音琴、中村士光、矢野一郎、齋藤拳三、野澤金三夢、三枝松尾、永井辨吉の諸氏は、八王子市元横山町大義寺の師の墓に詣で、讀經後料亭濱の家にて夕餐を共にし、各々故人より敎はりたる義太夫を一くさりづゝ演奏し、故師を追悼して散會した。

東都五十義會大關引退

高瀨操氏の祝賀會

高瀨操氏は東都五十義會東大關に据ること三回繼續、斷然正大關の榮譽に輝き、今回大關引退の祝賀義太夫大會を來る十二月十日正午より、濱町日本橋倶樂部に於て華々しく開催する事になつたが、當日は野澤道之助連を始め五十義會の審査員長谷川文久、星野桔梗、安藤光樂、吉田三芳の四氏が應援として出演、大切には忠臣藏七段目の掛合を上演し、三味線は高瀨操氏多年錬磨の腕を振つて彈奏するといふ實に十三年度の掉尾を飾る豪華な催ほしである。番組は左の通り。

白浪五人男(御祝儀掛合)駄右衞門(清菊之助(喜鳳)忠信(玉寶)赤垣(正鳳)南鄕(千昇)杵屋連中……辨慶(千昇)赤垣(文林)朝顏(正鳳)先代(喜鳳)酒屋(銀司)阿漕(金鳳)忠四(筑波)陣屋(玉寶)安達(巽)身賣(清)逆櫓(旭)以上絃(道之助)挨拶……河庄(桔梗、辰六)彌作(光樂、猿平)鮨屋(三芳、猿三郎)日蓮記(文久、猿平)壺坂(操、道之助、ツレ扇之助、美之助)以上抽籤順……大切忠臣藏七段目(掛合)由良之助(清)九太夫(文久)重太郎(猿三郎)喜太八(美之助)おかる(三芳)亭主(道之助)力彌(玉寶)彌五郎(扇之助)伴內(光樂)平右衞門(桔梗)絃(高瀨操)

大阪 文樂座師走興行

文樂座人形淨瑠璃は十二月九日より十日間、四ツ橋文樂座にて開演。菅原傳授手習鑑=「車先」松王(辰太夫)梅王(さの太夫、常子太夫)櫻丸(宮太夫、駒若太夫)杉王(相瀨太夫、松島太夫)時平(播路太夫)(寬市、叶太郎)「茶筌酒」(長尾太夫、喜代之助)(源太夫八造)「喧嘩」(千駒太夫、竹太夫、團伊三、鶴太郎)「櫻丸切腹」(文字太夫、吉左)

伊賀越道中双六=「岡崎」前(相生太夫、道八)奥(織太夫、團六)

曲輪文章=「吉田屋」中(富太夫、叶太郎)(源太夫、寬市)切(駒太夫、清二郎)ツレ(喜代之助、八造)

御所櫻堀川夜討=「辨慶上使」(和泉太夫、重造)(呂太夫、寬治郎)

冥途の飛脚=「龜屋內より羽織落し」(和泉太夫、友右門)(呂太夫、寬治郎)

鶴澤勝鳳師逝く

太棹三絃界の老重鎭鶴澤勝鳳師が永眠され、去る四日告別式が行はれたといふことを、本號の校正の終つた只今聞きましたので、餘白もなく詳報する事間に合はず、謹んで追悼の意を表します。

太棹社

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀨いろは氏
岡崎円六氏
吉川浪補氏
平野ろ昇氏
阿部一氏
北島北斗氏
中澤巴氏
竹内とをる氏
安藤どくろ氏
吉田登盛氏
小川都山氏
安藤都昇氏

保々長平氏
栗原千鶴氏
神馬里芳氏
本木大熊氏
鈴木和樂氏
小林和舟氏
本多可笑氏
大和田可笑氏
飛石かなめ氏
加藤兜氏
高橋可遊氏
西田可松氏
大用大嘉津氏

田口辰壽氏
疋田大龍氏
井上巽氏
小林太二八氏
根本團壽氏
野田高尾氏
坂倉素遊氏
浮谷祖樂氏
小埜長とろ氏
宮本武藏氏
萩原うつぼ氏
乃村乃菊氏
中野吳羽氏
山下彌生氏
國井丸都氏

松林福笑氏
鈴木兒雀氏
水戸部壽氏
原田越巴氏
河野國聲氏
松岡語松氏
田中湖月氏
寶藏寺天昇氏
大築葵氏
松本朝章氏
及川旭氏
柳有明氏
寺岡三幸氏
木村さかえ氏
齋藤山生氏

平井榮氏
細川清氏
金田金鳳氏
井田菊泉氏
錦　錦松氏
淺田奇聲氏
歸山歸世花氏
川奈部銀司氏
猪谷銀水氏
岩木義雀氏
吉良蟻若氏
岩田末成氏
高瀨　操氏
吉田美地句氏
横井三由氏

野口みなと氏
岡田　源氏
北村三葵氏
池田三國氏
吉田三芳氏
鈴木松實氏
玉井松樂氏
菊池秋月氏
平井壽樂氏
山田壽瓢氏
田口司重氏
濱口秋華氏
武笠宏亮氏
高品一重氏
桑原美峰氏

松岡茂里雄氏
白井清華氏
近江清華氏
湯原清司氏
沼井盛鶴氏
時田靜史氏
（地方之部）
米國平野一昇氏
同武　榮玉氏
同杉山陶岳氏
同兼廣廣玉氏
同西本西紫氏
樺太宮下杉鳳氏
横濱田島集樂氏
大垣吉岡十八公氏

當座帳

▽安藤どくろ氏　十月廿八日朝鮮へ。十一月十五日歸京。

▽橋本三司氏　病氣靜養中。

▽近江清華氏　中老會へ入會。

▽米谷米翁氏　淺草區象潟町一丁目四番地へ轉居。

▽青木大和氏　横濱市鶴見區潮田堀ノ内二〇五〇番地へ轉居。

▽岡崎圓六氏　母堂八十二の高齢にて十月十七日永眠。

▼豊澤松市郎　日本帝都義太夫因會へ入會。

▼鶴澤六兵衛　鶴澤六太郎改鶴澤六兵衛は、今回山形より小石川區八千代町三八番地（三井定次郎方）へ移住。

▼豊澤廣助　催十一月廿三日上京。

▼竹澤龍造　熱海市旭町に藝妓家『新鈴よし』を經營。電話熱海三四三〇番。

▼豊竹巖太夫　十一月廿八日京都へ。

▼豐澤良平追善義太夫會　十二月五日並木倶樂部に開催。

蝶花樓馬樂長演會

北支へ慰問の旅をして歸つた蝶花樓馬樂が、十月卅日夜神田立花亭で長演會を催ほした。

本人の馬樂、昨夜で終つたつもりの東寶名人會が今夜もあつたなどゝてんてこ舞をしたのも落語家らしく、宿屋の仇討文七元結、支那人氣質を車輪に演じたが文七元結は既に師匠を壓倒するかに見えてうれしかつた。

編輯後記

◆今回弊誌百號記念特輯に際し、『祝百號』御芳名の掲載方を皆々様に御願ひ申上ました處、多數の御賛同を得まして光榮の至りに存じます。

◆近頃頗る多忙を極められ、その爲め安藤鶴夫氏の原稿が遂に間に合はなかつた事は殘念ですが、新年號には執筆される事になつてゐます。

◆昭和十三年も逝かんとし、寒さも愈々本格に向ひます。皆様の御自愛を祈ります。

芳河士

定價

一部	金三十錢	郵税三錢
六月分	金一圓八十錢	郵税共
一年分	金三圓	郵税共

廣告料

普通	一頁	金貳拾圓
特別	一頁	金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増但三錢切手の事

第百號　（毎月一回廿五日發行）

昭和十三年十二月七日印刷納本
昭和十三年十二月十日發行
東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿
東京市牛込區早稲田町五八
印刷人　栗原榮松
東京市牛込區早稲田町五八
印刷所　栗原印刷所　電話牛込一九五一番
東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社
振替東京三一七八五番

昭和十三年十二月七日印刷納本
昭和十三年十二月十日發行
（毎月一回廿五日發行）
太棹（第百號）
定價 金參拾錢

新築落成

高級アパート

綠莊

○五二ノ二町淵岩區子王
赤羽驛東口下車・郵便局裏

御申込みは直接弊莊又は電話谷下六一八一番
（田坂）を御利用下さい